

# 日韓戦争 対馬沖海戦

ヤマト2015

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※本作はフィクションであり実在の人物組織とは一切関係はありません。

2030年代、韓国にて極右政党が政権を奪取し領土回復の名目の元対馬へ進攻を開始した。

これに対し日本政府は自衛隊から組織改正した国防軍を派遣し対馬奪還を図った。

命令を受けて東郷毅二等海将を司令官とする国防海軍第一艦隊が対馬へ向け出撃した。

11月27日

運営からのご指摘を受けて原作を大帝国に変更しました。

2021年2月より、リニューアル中。

# 目次

各種設定	1
日本篇	1
日本海軍 艦艇、航空機篇	6
韓国篇	13
韓国海軍艦艇篇	17
本編	
プロローグ 韓国サイド	21
プロローグ 日本サイド	25
第一話	31
第二話	34
第三話	37
第四話	42
第五話	46
第六話	53
旧作	
第1話	56
第2話	60
第3話	62
第4話	69
第5話	78
第6話	85
最終話	90

## 各種設定

### 日本篇

#### 国内事情

2018年以降に行われた大規模な財政改革および海底資源（メタンハイドレートやレアメタル等）の採掘技術の確立とそれにもなう特許の取得により財政赤字を止め、ついには減額にまで転じることに成功する。

また、赤字転じによる内需も活発化したことも大きな要因でもあると言われている。

上記の財政問題の解決および周辺諸国の問題が激化したことにより防衛能力の向上を計り、海上自衛隊を中心に装備と規模の拡張を行った。

また、これに前後して長年議論的となっていた憲法改正に着手し結果、国民投票でも過半数を獲得し戦後73年目にして初めて憲法の改正を行うに至った。

#### 軍備

憲法改正の後に自衛隊は国防軍と名称を変更した。

しかし階級については名称はほとんど変わらず唯一変更されたのは将の階級で二等と一等に分けられることとなった。（例 二等海将

一等海将）

以下装備保有数は2030年時点のものを表記。

#### 陸軍

基本的な編成は現在の自衛隊と変わらないが旅団に格下げされた第七旅団を師団へと再度規模を拡大しそれ以外の北海道にある師団は旅団へ縮小された。

また、戦車は北海道の第七師団、関東の第一師団、九州の第四師団へ集中配備され、その他の師団と旅団には高機動戦闘車を装備し機動

力を高めている。

また、A H―1の後継として13機で導入打ち切りとなったA H―64Dの代わりに最新モデルのA H―64Eの導入を進めている

保有装備※主だったもののみ記載

戦車

90式 341両

10式 200両

機動戦闘車

16式 300両

戦闘ヘリ

A H―1 ヒュイコブラ

60機

A H―64D アパッチ

13機

A H―64E アパッチ

30機(調達予定数90機コブラの代替

含む)

空軍

旧式となったF―4を更新するためにF―35Aの導入を進め、また完全国産の戦闘機F―3震電の配備を進めている。F―15は軍備拡張のため機内の電子装備品を中心に近代化改修を行い現在も現役にある。

保有機

戦闘機

F―3A震電 30機

F―35A 60機

F―2A 64機

F―2B 34機

F―15J 165機

F―15D J 50機

早期警戒管制機

E | 7 6 7

4機

E | 2 D

1 3機

輸送機

C | 2

4 0機

C | 1 3 0

1 4機

給油機

K C | 1 3 0 H

2機

K C | 7 6 7

4機

K C | 4 6 A

2 0機

海軍

三軍中最も規模を拡張しており艦艇数は自衛隊時代の2倍以上と  
なっている。

中核戦力として四個機動艦隊を有しさらには沿岸海域警備用の護  
衛艦隊を一個有している。

護衛艦隊は四個の護衛隊からなっており主に近辺海域の警備、海賊  
対策の派遣、機動艦隊の前衛を務める。

各艦隊が4つなのは常に最低一個艦隊が高錬度で配備できるよう  
にするためである。

保有艦船と編成

機動艦隊

第一艦隊、第四艦隊

一個艦隊につき

イージス戦艦

1隻

空母

1隻

ヘリ空母

1隻

イージス巡洋艦

2隻

イージス駆逐艦

2隻

汎用駆逐艦

9隻

第二艦隊、第三艦隊

一個艦隊につき

軽空母

1隻

イージス駆逐艦

2隻

汎用駆逐艦

5隻

護衛艦隊

第一護衛隊と第四護衛隊

一個護衛隊につき

ヘリ搭載駆逐艦

1隻

汎用護衛艦

4隻

潜水艦隊

直轄艦 潜水救難艦 4隻

第一潜水隊と第四潜水隊

一個潜水隊につき

潜水艦 6隻

輸送隊

第一輸送隊

輸送艦 3隻

第二輸送隊

輸送艦 4隻

補給隊

第一海上補給隊

補給艦 5隻

第二海上補給隊

補給艦 5隻

航空集団

P-1哨戒機

60機

P-3C哨戒機 20機

※空母艦載機および対潜ヘリは割愛。



## 日本海軍 艦艇、航空機篇

大和型イージス戦艦

全長 287メートル

全幅 40メートル

速度 31ノット

乗員 1100名

兵装

45口径460mm三連装砲 3基

60口径203mm単相砲 4基

62口径127mm単相速射砲 4基

62口径76mm単相速射砲 4基

ミサイルVLS 128+128セル

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM11連装ミサイル発射機3基

35mm連装CIWS 4基

20mmCIWS 6基

艦載機 へり最大 4機

同型艦 大和、武蔵

2025年に再び世界最大、最強の軍艦として就役した超弩級戦艦。

外観は先代大和の最終時であるが先代大和よりも一回りほど大型化しており、尚且つ艦の機能のほとんどが自動化、省力化したことにより先代の半分以下の乗組員での運用が可能となっている。

イージスシステムは最新のベースラインを搭載しBMD(弾道ミサイル防衛)能力も当初から搭載している。また艦内の最深部にはスーパーコンピュータが搭載され破格の情報処理、指揮通信能力が与えられている。

艦内のバイタルパートは自艦の主砲はもとより理論上トマホークミサイル40発は命中しても貫くことはないと言われている。

主砲の45口径46cm三連装砲は通常砲弾で最大50kmの射程を

持ち、誘導砲弾を使用すれば最大100 km先の目標に命中させることが可能である。しかし誘導砲弾は機密性が高く、なおかつ高価なので数斉射分しか搭載されていない。

搭載されている35 mm連装CIWSは87式高射機関砲の砲塔部を利用してある。その大ききゆえに本艦型のみが搭載している。

本艦はただ単純に先代大和を復活させたという訳ではない。最初の計画は冷戦中の最中と言われている。

当時ソ連太平洋艦隊に配備されたキーロフ級に防衛庁は持てる戦力にて撃破可能かを秘密裏に検証した結果、撃破するにはかなりの犠牲を強いられるというものであった。

そして考え出されたのが大口徑砲弾による撃破であった。

また終戦からそれほど時間がたっておらず大和の技術が少なからず残っていたのもそれを可能と判断された要因でもあった。

しかし、当時の国内事情と財政ではこれほどの艦を建造することはできず、また造船所も高度経済成長の真っ只中でどこもそのようなものを造る余裕がなかった事から計画は破棄されたはずであった。

しかし2010年以降の中国の強硬な海洋進出とそれにとまなう大幅な海軍増強政策と、その中国が極秘に建造しているとされる大型巡洋艦に対抗するため再び注目され現代に合わせた装備を施され当時の面影を残しつつ現代の戦闘に耐えうる戦闘艦として就役することとなったのである。

#### 赤城型通常動力空母

全長 308メートル

全幅 船体40メートル／飛行甲板70メートル

速度 31ノット

乗員 900名／航空要員400名

兵装

62口径76 mm単相速射砲 4基

RAM11連装ミサイル発射機 3基

20 mm CIWS 5基

## 艦載機

F-35B 44機

ヘリ 6機

等最大 50機

同型艦 赤城、天城、

大和型とほぼ同時期に就役した大型空母。

外観はロシアのアドミラルクズネツォフ級にいずれも型の艦橋をのせたデザイン。計画初期は原子力動力とすることになっていたが原子力実験船むつの失敗とコストパフォーマンズの面から通常動力となった。

また、アメリカの空母よりも個艦防空能力が高いのはアメリカ海軍よりも艦艇の余裕がないためである。

装備している兵装は退役した護衛艦から流用されたものが多く、建造費の低減を図っている。

## 高雄型イージス巡洋艦

全長 188メートル

全幅 22メートル

速度 30ノット

乗員 330名

兵装

60口径203mm単相砲 3基

ミサイルVLS 64+64セル

四連装対艦ミサイル発射機 2基

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM11連装ミサイル発射機 2基

20mmCIWS 2基

艦載機 ヘリ最大2機

同型艦

高雄、那智、衣笠、青葉

大和型および赤城型の直衛艦として建造されたイージス巡洋艦。

主砲の203mm単相砲は大和型の副砲と同一のもので対地、対艦攻撃に特に優れている。同砲は元々はアメリカ海軍が試作したMk7 1、8インチ砲塔を改良し、命中性と速射能力を向上させたタイプである。

砲塔配置は前部に二基、後部に一基の配置で、前部は背負い式に、後部砲塔はアメリカのタイコンデロンガ級のよう一段下がった甲板に配置されている。

計画段階ではズムウォルト級のような外観をした対地攻撃艦として計画されていたが建造費が通常の艦の3倍ほどになることから愛宕型イージス駆逐艦の拡大型となった。

艦の素性が以外と良かった事からアメリカがタイコンデロンガ級の後継として改良型の建造を打診していると言う。

摩耶型イージス駆逐艦

全長 170メートル

全幅 21メートル

速度 30ノット

兵装

127mm単相速射砲 1基

ミサイルVLS 64セル+32セル

四連装対艦ミサイル発射機 2基

三連装対潜魚雷発射管 2基

20mmCIWS 2基

艦載機 ヘリ最大2機

同型艦

摩耶、羽黒

旗風型の更新のため建造された改愛宕型イージス駆逐艦。現在の海上自衛隊が運用しているまや型イージス護衛艦。就役当初からBMD能力を有する以外は愛宕と同等である。

朝日型汎用駆逐艦

全長 151メートル  
全幅 18.3メートル  
速力 30ノット  
乗員 210名  
兵装

127mm単相速射砲 1基  
ミサイルVLS 32セル  
四連装対艦ミサイル発射機 2基  
三連装対潜魚雷発射管 2基  
20mmCIWS 2基  
艦載機 ヘリ1機

同型艦

朝日、不知火、雪風、陽炎、  
浦風、浜風、磯風、谷風  
萩風、嵐

村雨型、高波型、秋月型と共に機動艦隊のワークホースとなる汎用  
駆逐艦

現実のあさひ型護衛艦と同一。

阿賀野型ヘリ搭載駆逐艦

全長 159メートル  
全幅 17メートル  
速力 33ノット  
乗員 90名  
兵装

127mm単相速射砲 2基  
ミサイルVLS 32セル  
三連装対潜魚雷発射管 2基  
20mmCIWS 2基  
艦載機 ヘリ最大3機

同型艦 阿賀野、能代、矢矧、酒匂

護衛隊群の旗艦として建造された駆逐艦で、現実の「もがみ」型を延長し主砲を前部に2基搭載した艦影となっている。

#### 最上型護衛艦

全長 132メートル

全幅 16.3メートル

速力 33ノット

乗員 70名

兵装

127mm単相速射砲 1基

ミサイルVLS 16セル

四連装対艦ミサイル発射機 2基

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM11連装ミサイル発射機 1基

艦載機 ヘリ1機

同型艦

最上、熊野、三隈、阿武隈

利根、筑摩、球磨、多摩

木曾、長良、五十鈴、名取

由良、鬼怒、北上、大井

黒部、川内、神通、那珂

護衛艦隊の主力の新型護衛艦。モデルは現実の海上自衛隊が保有している「もがみ」護衛艦。

阿賀野型と同様に前衛任務や船団護衛任務などを勤める。

阿賀野型、最上型共に乗員をかなりの省力化を行っているためダメージコントロールに問題があるのではないかとの指摘もある。

全長 16.4メートル  
全幅 13.2メートル  
航続距離 2250キロメートル(増槽着)  
兵装

機体内部

20ミリ機関砲×1基

対空ミサイル×4

対艦ミサイル×2

その他爆装

機体外部

対空ミサイル×8

対艦ミサイル×4

その他爆装

F-2の後継として開発された国産マルチロールステルス戦闘機、先進技術実証機(通称心神)より得られた技術を導入して開発された。

推力偏向ノズルにより高い格闘戦闘能力を誇る。

外観はエースコンバットの震電を後退翼にしたデザイン。

## 韓国篇

### 国内事情

2013年に当選した政権以降国内経済が悪化し、さらに国内の不満をそらすために日本への敵対心を煽り続けた結果、さらに国内の経済が悪化するという負の悪循環に陥ってしまった。

2018年に政権交代が起こってから対日関係はさらに過激なものとなっていき、日本の軍備拡張に対抗し海軍の大幅な拡大へ邁進するようになる。

2020年の疫病流行によって経済が低迷してもその拡張は続けられていった。

この予算の出どころは本来陸軍のものや大量の国債の発行で賄ったとされているのだがそれだけでは賄いきれるものではないため出所不明の資金の流れが噂されている。

こういった政策を強行した結果三度目の通貨危機どころか財政破綻寸前にまで財政状況が悪化してしまった。

そして2028年からの現政権になってからは政権批判や都合の悪い事への報道規制が激しさを増し、国家の民主主義ランキングは隣国北朝鮮と大差ないほどにまで落ちてしまうという事態にまでなってしまう。

### 軍備

#### 陸軍

2018年の政権交代以降海軍の方へ予算と人員を抜き取られ続け2030年の人員は以前の半分ほどにまで削減されている。

韓国政府は最新の装備により兵員の削減を行っても問題はないとしているが実際には装備の更新はほんの僅かで最新装備の部隊もほとんどが練度が低い状況となっている。

### 装備



戦車

K 2 100両

K 1 A 1 200両

K 1 300両

戦闘ヘリ

A H 1 F K 60機

空軍

陸軍に比べて大幅な削減はなかったものの、装備の更新はあまり進んでおらず、F-35も予定変更により海軍に殆ど人員ごと抜き取られたため、F-15K 60機以外の機体は旧式化、陳腐化が激しくなっている。

装備

戦闘機

F 35 A 20機

F 15 K 60機

F 16 C 118機

F 16 D 47機

F 4 60機

早期警戒管制機

B 737 AEW&C 4機

偵察機

R F 4 C 18機

輸送機

C 130 16機

空中給油機

A330 MRTT 4機

海軍

日本が海軍の拡張を行ってからそれに対抗するように規模を拡大するようになった。

特に軽空母を保有したことにより極東アジアで中国、日本に次ぐ海軍力を持つに至ったが急速に艦隊の規模を拡大したことによる障壁として練度が総体的に低く、また、極度の財政難により活動は低調であり、また活動している艦艇もやや旧式艦艇の場合が多いため、最新鋭艦になるほど練度が低い状況がほとんどとなっている。

第1艦隊、第3艦隊

1個艦隊に付き

駆逐艦 1隻

フリゲート艦 4隻

ミサイル艇 8隻

第5戦団

掃海艇 9隻

揚陸艦 4隻

強襲揚陸艦 2隻

第6戦団

P3C 30機

哨戒ヘリ 50機

第7機動艦隊

軽空母 2隻

イージス駆逐艦 6隻

汎用駆逐艦 12隻

フリゲート 8隻  
潜水艦 4隻

第9戦団

潜水艦 12隻

※韓国にとって4の数字は不吉なものとしてされるため番号が割り振られていない。

## 韓国海軍艦艇篇

金 忠善 級軽空母

全長 250メートル

全幅 38メートル

速度 30ノット

乗組員 600名

兵装

8連装対空ミサイル発射機 2基

ゴールキーパー30mm CIWS 2基

RAM21連装ミサイル発射機 2基

艦載機

F35B 25機

ヘリ 5機

等最大30機

同型艦

金 忠善 (キム チュウゼン)

李 如松 (リ ジョウシヨウ)

2026年に就役した韓国海軍初の本格的軽空母。外観はアメリカ級強襲揚陸艦の艦体に強襲揚陸艦 独島 の艦橋を乗せたデザイン。そのためスキージャンプ台は有していない。

ウエルドックも有しておらず揚陸能力はヘリのみとなっている。

1番艦は建造中に不具合が発生し、その後も故障などが頻発したため2番艦が先に就役することとなった。前述の就役年も2番艦 李如松の就役年数を記している。

本級は第7機動艦隊の2つあるグループのそれぞれの旗艦として運用されているため、相応の指揮通信能力があるが搭載している情報統合システムが本級だけであり他の艦艇はやや旧式の情報統合システムのため、タイムロスの発生が激しくなっている。

しかし、それでも航空戦闘能力はアメリカ級と同等のため全性能が発揮されればその力は決して侮れるものではない。

金 誠一 級イージス駆逐艦

全長 165メートル

全幅 21メートル

速力 30ノット

乗組員 300名

兵装

127mm単相速射砲 1基

ミサイルVLS 48セル＋80セル

四連装対艦ミサイル発射機 4基

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM21連装ミサイル発射機 1基

ゴールキーパー30mmCIWS 1基

艦載機 ヘリ最大2機

同型艦

金 誠一(キム ソンイル)

宣祖 (ソンジョ)

権 慄 (クウォン ユル)

2025年に1番艦が就役した韓国2タイプ目のイージス駆逐艦。世宗大王級の改良型で国産VLSを廃止して一つに統一した以外は同じである。

世宗大王級と同様にBMD能力は有していないがその分、対空ミサイルを多めに搭載することができるため後続戦闘能力は日本の愛宕型イージス駆逐艦よりも優れている。しかしやはり排水量に比べてトップベビーのため一度バランスを崩すと傾斜が戻りにくいのが最大の弱点である。

壇君級汎用駆逐艦

全長 150メートル

全幅 17メートル

速力 30ノット

乗組員 300名

兵装

127mm単相速射砲 1基

ミサイルVLS 64セル

四連装対艦ミサイル発射機 2基

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM21連装ミサイル発射機 1基

ゴールキーパー30mmCIWS 1基

艦載機 ヘリ最大2機

同型艦

壇君 (ダンクン)

蔣 英実 (チャン ヨンシル)

金 輿信 (キム ユシン)

許 浚 (キョシュン)

金 正浩 (キム ジョンホ)

金 富軾 (キム プシク)

韓国第7機動艦隊において忠武公李瞬臣級駆逐艦と共に艦隊のワークホースとなる駆逐艦。

汎用駆逐艦と記されているが韓国海軍の艦種は李瞬臣級と同じDDH、ヘリ搭載駆逐艦となっており通常の駆逐艦より上位の存在とされている。

李瞬臣級の改良型で主にVLSの数を増加し、レーダーを自主開発のフェーズドアレイレーダーに換装したのが特徴。カタログデータ上では秋月型にも退けをとらないが故障が多発しているのが難点といえる。

仁川級フリゲート バツチ3型

全長 120メートル

全幅 14メートル

速力 30ノット

乗組員 140名

兵装

127mm単相速射砲 1基

ミサイルVLS 32セル

四連装対艦ミサイル発射機 2基

三連装対潜魚雷発射管 2基

RAM21連装ミサイル発射機 1基

20mmCIWS 1基

艦載機 へり最大1機

同型艦

バッチ1 6隻

バッチ2 6隻

バッチ3 8隻

老朽化したフリゲート艦の更新のため建造された新型フリゲート艦。バッチ3は全長を伸ばしてミサイルVLS32セルを増設し対空戦闘能力を向上させたタイプである。バッチ1および2は第1〜第3艦隊に配備され、バッチ3が第7機動艦隊に配備されている。

## 本編

### プロローグ 韓国サイド

20XX年 韓国 ソウル 大統領府 青瓦台 某日

韓国の政治中枢のこの場所である会議が開かれていた。

この内容を知っているのは大統領と軍部を含めて極僅かの者達であった。その内容が今回の会議で全閣僚に対して公開されていた。

閣僚1「こんなことが……」

閣僚2「いつの間に……」

資料の内容を見た閣僚達は皆驚きの表情を浮かべていた。

資料の表紙にはハングル文字でこう記されていた。

#### 《対馬奪還作戦概要》

韓国が日本の対馬に対する軍事進攻作戦の内容がしるされていた。韓国国内では対馬は古来から韓国の領土であり日本に不法占拠されているとする世論が少なくない。

その不法占拠されている島を奪還し、日本に対して謝罪と多額の賠償金を迫る。

大まかな話の内容はそう書かれていた。

閣僚1「大統領、本当このような事を……なにかの冗談ではないのですか？」

大統領「当然だ。既に決定されたことであり、冗談などではない。」

韓国の国家元首たる大統領はさも当然のように答えた。

彼は極度の反日家として有名であり、事実彼が大統領に就任してからは前任者以上に日本に対して強硬な姿勢を取ってきた。しかし、そういった政策は徐々に綻びが生じ始めていった。時間をかけて日本に譲歩を迫る方法から目に見える形での成果を韓国国民は求めるようになったのである。

その答えが今回の対馬奪還作戦であった。作戦名に『侵攻』ではなく『奪還』と言う文字を入れているのも今回の作戦が韓国側に正統性があると内外にアピールしたいと言う大統領の意図が込められている。



た。

閣僚「しかしながら閣下、かの国の軍事力は陸軍はともかく我が国よりも強力です。正面から戦えば多大な被害が予想されるかと愚考いたしますが……」

？「その点につきましては、ご心配には及びません。」

今回の会議の軍事方面進行担当者は自信に満ちた声で答えた。

軍事「この作戦は資料にも書かれていますが初戦において対馬を奇襲し、電撃的に奪還し、反撃の隙を与えません。日本が事態を把握する前に全島の防備を固めます。これは夜間に全てを行い、完了する予定となっております。」

担当者の説明に、少し都合が良すぎるのではないかと思わないでもなかったが現代の戦闘はスピーディーであるゆえ閣僚はそれ以上の疑問はもたなかった。

担当者は説明を続ける。

軍事「まず、我が第7機動艦隊の艦載機が対馬の主要な軍事施設及び電波塔を破壊します。その後空挺部隊と独島を旗艦とする揚陸艦部隊が敵軍事施設と空港と港を確保します。港及び空港の確保が完了しだい、待機していた輸送船舶及び輸送機により対艦、対空ミサイル他の重装備を可及的速やかに輸送し、日本の再侵略に備えます。」

大統領「その後我が国が対馬の領有権を国際社会へ宣言し、日本に対して謝罪と賠償金を要求する。もし日本側がこれを拒否すれば九州方面への攻撃をちらつかせ、ノコノコと出てきた日本軍を叩く、と言う訳だ。」

軍事担当から説明を繋げた大統領は真底楽しそうな顔を浮かべていた。

理由があつた。

現在韓国大統領の任期は一期五年のみとなっているが、現大統領はこの法律を改正すべく策を練っていた。

そしてそれを後押しする材料として今回の対馬進攻（奪還）作戦を利用しようと考えていた。

憎き日本から長年奪われていた領土を取り戻し、日本に懲罰をくわえる。そんな英雄像を演出することが出来れば大統領の任期の延期も容易くなる。

そんな計算が彼の内にあった。

結局の所、この軍事作戦には現大統領の権力欲が背景として存在していた。

そんな隠れた意図に気づくことなく閣僚が質問した。

閣僚3「米国の方へはなんと説明しますか？日本への軍事作戦をあの国が許すとは思えません……」

米国は日本と韓国、両国とも同意関係にある。米国からすれば大陸への足掛かりである韓国とその後方兵站基地となる日本が矛を交えるなど断固として認めることは出来ない事態であった。

軍事「その点に着きましても問題はありません。」

担当担当がまたしても自信たっぷりに答えた。

軍事「米国へは既に今回の兵力移動は全て演習のためと通達しており、在韓米軍司令官も承認しています。また、対馬を奪還した後の対応ですが、我が国防部の予測としては米国はあまり積極的な対応をとってくださることはないと思っております。」

閣僚3「どういふことかね？」

閣僚の一人が疑問を投げ掛ける。

軍事「米国は近年、在韓米軍を縮小し、その土地を我が国へ返却しています。これは我が軍の能力が向上したことにより自分達なしでも作戦遂行能力があると判断してのものだと思われます。また、表だって我が国を非難した場合、我が国の国内世論は親中へと向かう恐れがあります。このため米国は積極的な実力行使には出ず、双方の速やかな終結を容認する程度に留まる可能性が大です。」

軍事担当の予測は一方では間違っておりもう一方では当たっていた。

2010年代後半から在韓米軍が規模を縮小していたのは財政な余裕が失くなって来たからであり、それ以上でもそれ以下でもなかつ

たからである。

一方で米国は大陸への足掛かりと言う価値を韓国に対して有しており、対馬進攻の制裁が親中国の世論を形作るきっかけとなることを恐れるだろうとの予測は当たっていた。

大統領「素晴らしい。諸君！今こそ生意気な島国の劣等人種共に我が国の正義を知らしめる時なのだ！奴等は700年もの昔から回りの国を蹂躪し侵略してきた。他国の血を浴びることを楽しんでやまない野蛮人なのだ！その野蛮人から我が国の領土を奪った報いを奴等に支払わせてやる時なのだ!!」

大統領がここぞとばかりに声を張り上げる。その熱に殆どの閣僚は飲み込まれ賛同の拍手を送る。

その一方でこの熱狂に冷ややかな目をしたものも少数ながら存在した。

？（……はたして日本が本当にこの要求を呑むだろうか……）

彼の心の内の不安を他所に対馬進攻作戦の齒車は音を立てて回り始めたのであった……

続く

## プロローグ 日本サイド

20WS年 日本 呉 とある造船所

この日、呉の造船所にてある艦の進水式が執り行われようとしていた。

列席している者達の格好からしてそれが軍艦であることは間違いなかった。

しかし、そこに鎮座する新型艦は昨今の流行りのスマートな艦映とは程遠い重厚なフォルムを有していた。

280mを越える巨体に三連装の砲塔を前部に二基、後方に一基を載せた姿は正しく、現代では死語となった戦艦そのものであった。

？「なんとかここまでこぎ着ける事が出来ましたね、総理。」

総理「ああ、だがまだ安心は出来んよ。中国は既に同種の艦を就役させ実戦配備まであと僅かと言う状態。対して此方は進水を向かえたばかり、未だに向こうがリードしている状態なのだぞ、防衛大臣。」

艦のちようど真前に設けられたVIP席にて総理大臣と防衛大臣は艦が無事進水まで向かえたことに喜びつつもまだ道半ばと言う状態だという事を再度認識した。

第二次世界大戦から80年近く経ち、戦艦は今や過去の遺物、ロマンの一種であり、今さらそんな艦を建造する国は何処にも存在しない………と思われていた。

数年前に中国が進水と同時に世界に向けて公表した新型艦がその常識を覆した。

一番艦を「鎮遠」と命名されたこの新型艦は280mm三連装砲塔を四基装備し、各種レーダーとミサイルVLSを装備した正に現代の戦艦として世に現れたのである。

当然、各国はこの艦の情報を調べるため合法、非合法問わず活動を実施した。

そしてそこから得られた情報から多数のシミュレーションを行った結果から得られた結論は至極簡単であった。

『自分達も同種の艦を配備する』と言うものであった。

特に隣国である日本は早期に実戦配備しなければ軍事バランスの崩壊と言う最悪の事態が予想された。

このため設計時間を短縮するため嘗ての戦艦の設計を流用し、現代の技術に合うように改良を行うと言う手法がとられる事となったのである。

その成果が今、二人の目の前にある光景であった。

《それではこれより命名式ならびに進水式を執り行います》

アナウンスに促され防衛大臣が立ち上がりステージの方へ歩いて行く。

そして自衛艦命名書を読み上げる。

防衛大臣「本艦を大和と命名す！」

嘗て世界最大、最強と謳われながらも活躍することが叶わず沈んだ戦艦が蘇えった瞬間であった。

音楽隊が奏でる軍艦マーチをBGMにしながら拍手を送る総理は叶うならこの艦が一度も砲門を開くことがないようにと祈っていたが、残念な事にその願いが叶う事はなかったのである。

数年後 青森沖 太平洋上 第一艦隊旗艦 大和 艦橋

この日、日本国防海軍第一艦隊は全艦揃つての演習のため青森沖を航行していた。

オペレーター「天龍より通信、目標設置完了！現在本艦の2時の方向、38kmを航行中！」

東郷「状況開始、全艦戦闘配置につけ！」

オペレーターの報告を受けて第一艦隊司令官 東郷 毅（とうごう つよし） 二等海将（38） が演習開始の号令を発した。

大和艦長の杉田 淳三郎（すぎた じゅんさぶろう） 一等海佐が戦闘配置を命令し大和乗員が各々の配置場所へと着く。

5分程で大和の戦闘配置は完了し、その1分後には艦隊全艦の配置が完了したとの報告が上がってきた。

東郷「全艦配置完了まで6分か…最初の頃の13分から大分縮める事が出来たな。」

秋山「はい、これまでに艦隊揃つての演習を10回以上に渡つて繰返してきましたからね…」

首席幕僚の秋山 敬一郎（あきやま けいいちろう） 一等海大佐（36）がこれまでの演習回数を持ち出し思いにふけた。

凡そ80年ぶりの戦艦の登場と言う事もあり、殆どが手探りの状態での訓練となっていた。

一時は湾岸戦争時のアイオワ級の元乗組員を招き入れ、その運用方法のサポートを受けた程だった。

杉田「これより主砲の砲撃訓練に入る！甲板要員は艦内へ退避！」

杉田「右舷砲撃戦！主砲射撃準備！」

杉田艦長の号令により甲板要員は急いで艦内へと入る。

46センチ主砲の衝撃は間近で浴びれば身体が吹っ飛ばされるところか内臓が飛び出てしまうほど強烈なものなのである。

ともかく、甲板要員が退避していくのと平行して主砲の射撃準備も進められていく。

その大きさから想像もつかないような速さで46cm三連装砲塔三基が旋回し、目標へと砲身をむける。

砲塔内部では自動化された揚弾機により砲弾と装薬が弾薬庫よりあげられ、砲身内へ装填される。

砲雷長「主砲射撃準備ヨシッ！目標標準ヨシッ！警報！」

主砲の射撃準備が全て整うと砲雷長は警報を発動させた。警報が鳴り止むと同時に杉田艦長が発砲を命じた。

杉田「主砲斉射！撃ち方始め！」

砲術員「撃ち方始め！」

砲術員が引き金を引いた瞬間、三基合計9門の46センチ砲弾が放たれた。

見張り員「弾ちゃーく…今!!」

直後、目標の近くを水柱が覆った。

オペレーター「見張りからの報告！砲弾、全弾、遠！」

杉田「誤差修正急げ！」

その後も、艦隊演習は続き、ダメージコントロール訓練、艦隊陣形変更は元よりあらゆる想定を模した訓練は昼夜を徹して行われたのであった。

#### 第一艦隊編成

第一戦隊 大和、高雄、雪風、陽炎

第三戦隊 赤城、那智、浜風、磯風

第七戦隊 日向、摩耶、村雨、雷

第九戦隊 霧島、秋月、曙、有明

#### 東京 首相官邸

第一艦隊が青森沖で演習を行っていた頃、日本の首相官邸では総理がアジア大洋州局局长と参事官および北東アジア第一課長が執務室にてブリーフィングを行っていた。

局長「今年に入り中国海軍は巡洋戦艦 鎮遠、および山東型空母を中核とした機動艦隊の演習を活発化させております。これは我が国が大和型、赤城型を就役させた事による対応および牽制、そして南沙諸島の領有をアピールするためと思われるかと存じます。」

参事官「また、他のアジア各国は我が国の軍備拡張を懸念を表明しつつも歓迎、或いは沈黙を保っている状態です。」

総理「それ程までに中国の海洋進出が激しさを増していると言う事なのかね？」

局長「おそらくはそうかと…しかしながら例外が一ヶ国だけあります…」

中国はともかく他の国々からも批判的な意見が多数を閉めていると思っていた総理は意外だと思った。

とはいえ例外があるのもまた事実であった。

ここへ来て北東アジア第一課長が口を開いた。

北東アジア第一課は韓国を外交を担当する部門である。

課長「数年前の大和の進水以降、韓国は我が国を非難する声明を発表。主要な新聞の一面トップの殆ども『軍国主義の再来！』『亡霊の復

活!!』と言った見出しが占めています。その後も事あるごとに非難声明或いは報復政策を実施してきました。さらには我が国に対抗して海軍の拡大を急ピッチで進めております。」

課長の説明を受けた総理は内心またかとウンザリした気持ちとなった。

かの国は2010年代後半辺りから日本への反発を強めていっており現職の大統領となってからは異常ともいえる程となっていた。事あるごとに非難声明を行う事は日常茶飯事として時には政策の中止を實行しなければ報復を行うという、恫喝紛いの行為まで行い始めている。かの国の政治家が自らの票を得る為に反日政策を行って来たのは昔からではあるがここ最近の動きはやはり異様であった。

総理「たしか軽空母2隻を中核とした機動艦隊を編成したのだったな。」

課長「はい、既に全艦が訓練を終了し、実戦配備に着いています。」

課長が資料を取り出し総理へ渡した。

資料を読みながらも課長の話が続く。

課長「また、ここ最近になって韓国の海洋警察の船舶が対馬付近にて我が国の海保船舶に対しての挑発行為を繰り返しています。」

総理が読み終わった資料をテーブルの上に置く。

置いたのを確認して今度は局長が口を開いた。

局長「今回の軍備拡張により中国はおろか韓国にも口実を与えてしまったのではないかと懸念が局内で広がりつつあります。」

そう言う局長の不安を取り除くように総理は堂々とした態度で自らの結論を口にした。

総理「諸君らの懸念は理解しているつもりだ。しかしアメリカの軍事力が縮小しつつある現在、我が国が独力で国を守る力が必要不可欠なのだ。他人の顔ばかりを気にしすぎていては自分達が生きる残る事は出来ないのだよ。」

アメリカは2020年代初頭に全世界に流行した疫病によりその経済力に大きな打撃を受けていた。



現代に置いて経済の衰退はそのまま軍事力の衰退を意味していた。その結果、疫病の終息後は経済の建て直しに躍起となり今まではなかなか手がつけられなかった軍事費の削減に大鉦を振るうことになったのである。

その結果アメリカは非公式に日本の軍事拡張を支援し、また歓迎していた。

自分達が手を汚さずともその影響力を持続させることが出来るのならばその手を使わない理由がないからだ。

総理「これから諸君等に多大な負担を掛けることになるだろうがよろしく頼む。」

総理に頭を下げられては流石の三人も分かりましたと答えるしかなかった。

続く

## 第一話

2030年 9月某日

全ての準備が完了した韓国軍は行動を開始した。

韓国海軍の主力艦隊である第七機動艦隊が演習航海と称して出撃、攻撃隊の発進ポイントへと向かった。

また、独島を旗艦とする揚陸艦部隊が第3艦隊に護衛され出撃した。

対馬と韓国本土の距離は陸上機や巡行ミサイル等でも問題はない程近いのだが、日本とアメリカに察知されるのを避ける為今回は見送られた。その代わりに第七機動艦隊からの要請があれば支援を行うこととされた。

第七機動艦隊はかつて第七機動戦団と呼称されていた機動部隊だったが、艦隊の規模が拡大したため数年前に名称を変更したのだ。

その戦力は軽空母2隻を中核としてイージス駆逐艦6隻、汎用駆逐艦12隻、フリゲート8隻を有し、これらの艦艇を二つの戦団（第七一戦団および第七二戦団）に別れて運用される極東アジアでも指折りの規模を誇るものであった。

この艦隊の総指揮を取るのは朴 丙仁（パク ハイジン）中将（48）（第七一戦団司令官兼務）、朴は艦橋から自身の指揮する艦隊を見て、今回の作戦の成功を確信していた。

朴（倭奴（ウエノム））が対馬に置いている地上戦力は一個中隊程度、我が艦隊の前では紙切れも同然。後からノコノコと出てくるであろう平和に染まりきった彼奴の艦隊なんぞ我等の敵ではない。）

この時彼が想定している敵艦隊は東海（日本海）方面を担当する第三艦隊のみで他の艦隊のことは頭から抜けていた。頭の固い倭奴が他の区域から戦力を回すことはないだろうと考えていた。その判断が大きな間違いであることをこの時の彼は知るよしもなかった……

出撃した第七機動艦隊は欺瞞の為に二日程艦隊演習を行いながら攻撃ポイントへ移動、深夜の0100に攻撃隊を発艦させた。

発艦した攻撃隊はレーダーを掻い潜るために低空で飛行、そのため対馬のレーダーサイトがこの攻撃隊を探知した時は既に遅し、直後にレーダーが破壊された。

時を同じくして第3艦隊に護衛された揚陸艦部隊が対馬北部の港湾を目指して進撃を開始した。

しかし、此方はL C A Cを発進させようとしたところを日本側の巡視船に見えられてしまった。

巡視船は韓国の軍艦だと確認すると急いで管区に連絡しようとしたが、直後に駆逐艦「楊 万春」の砲撃をくらい撃沈された。

さらに偶然付近にいた日本の漁船に対しても彼らは攻撃を行った。自分達が来た事をまだ日本側に悟られなくなかったのが主な理由であった。

無論、これが国際法に抵触することは韓国側も承知していた。しかし彼等はあえて黙認した。

日本が相手ならばどうせ口先だけの抗議だけで終わると考えていた節が彼等の中にあつた。

攻撃隊がレーダーサイトと電波塔を破壊したことを知らせると輸送機が空挺部隊を投下していった。

攻撃を受けた対馬の各部隊は何とか体制を建て直そうとしたものの、その前に空挺部隊と上陸した部隊により殆どが制圧されてしまった。

幸いなのは通信端末と機密書類の破棄がな間に合ったことだった。

対馬の唯一の空港も職員共々あつけなく制圧されてしまった。

唯一、陸上自衛隊の対馬警備隊の大部分が山岳部に退避することが出来た。

対馬の陸自警備隊の隊員の殆どはレンジャー資格を持つ者で固められているため最初から施設の防衛はあまり考えておらずこのような状態になることは半ば予測済みであった。

このため通信設備の破壊と機密書類を焼却するために残っていた司令官と一部の隊員を除き、大部分が対馬の森の中へ溶け込んでいった。彼等は援軍が到着するまで身を隠しつつ情報を収集、援軍到着後

は後方攪乱および援軍の道案内をすることとされた。

その後も韓国からの攻撃は続き、北部の港湾は瞬く間に制圧。住民は拘束され公民館や学校へと集められる事となった。

中には漁船で逃げようとした住民もいたが韓国軍は見つけ次第、射殺或いは撃沈していった。

二時間後、対馬の主要な港湾部の占拠が完了し、奪取した空港にC-130輸送機が着陸し、装甲車や地对空ミサイルが次々と運ばれ、各所に配置されていった。

また、北部の浜辺にはLCACがピストン輸送を行い、戦車、自走砲を陸揚げし、対馬の玄関、厳原港へは待機していた輸送船が接岸し、地对地ミサイル、ハーブーン地对艦ミサイルを吐き出していった。

夜が明けた頃には対馬の防備が取り敢えず完成し、日の丸の旗が掲げられていた所には変わって韓国の国旗が掲げられていたのだった。

## 第二話

総理官邸 深夜0140

寝室にて睡眠を取っていた総理だったが緊急の電話の音で起こされ、次に電話の内容を聞き完全に眠気を醒ます事となった。

急いで着替えて危機管理センターへ移動すると既に関係閣僚が集まっていた。

総理「状況の説明をお願いする！」

総理の言葉に防衛省大臣が答えた。

防衛大臣「はっ！本日午前1時20分頃、対馬警備隊、および海栗島のレーダーサイトが空襲を受け破壊されたと現地から報告を受けました。いずれも韓国軍所属のF-35と判明しました。」

総理「韓国だと!?間違いないのか!？」

防衛大臣の報告に総理は最初信じられずにいた。

攻撃を受けた事ではなく、その相手が韓国であったということにある。

彼は最初、攻撃を行ったのは中国の方かと思っていたのだ。

表向きには領土問題は無いと公表しているものの、近年の尖閣諸島への強行姿勢を考えると軍事行動を起こすのは時間の問題と想っていたからだ。

ましてや、いくら韓国の政治家がこちらに敵対心を煽って来たとは言っても、それはあくまでも自らの票を得る為の一手段に過ぎなかったからだ。

それがまさかこのような暴挙に出るなど予想だにしていなかった。

防衛大臣「残念ながら事実のようです。彼等の機体はレーダーを掻い潜る超低空で侵入しました。韓国に現在配備されているステルス機のF-35Aは北部に配備されている事が確認されておりますのでこれらの機体は演習公開に出た第7機動艦隊の艦載機と思われれます。また、対馬警備隊からの報告では大型輸送機の編隊が飛来し、空挺部隊を降下させたとのこと。現時点では兵力規模は未だ不明です。」

そこまで説明すると防衛大臣はタブレットを操作した。少しして危機管理センターに設置されている大型の液晶画面に映像が写された。

画面には破壊されもうもうと黒煙が立ち込めているレーダーサイトだった施設が写されていた。

総理「海保からの報告はどうなっている？」

総理は今度は国交大臣に詳細を尋ねた。

国交大臣「はい、第七管区隊からの報告によりますと、ほぼ同じ時刻に、対馬に接近する韓国艦艇をレーダーで確認、視認出来る距離まで接近したところ揚陸艦独島他数隻の艦艇を視認、以上を管区本部に連絡をした所で通信が途絶、おそらく撃沈されたと思われまます…更にですが…」

ここまで話した国交省大臣だが、その直後に歯切れを悪くしながら報告を続けた。

国交大臣「…付近にいた漁船からほぼ同じ時刻に攻撃されているという趣旨の無線が複数報告されています…」

防衛大臣「まさか?!民間人を攻撃したと言うのか?!」

国交大臣の報告に防衛大臣が叫び、室内にいる全員も信じられないといった顔になった。

現代において民間人を意図的に攻撃、殺害することは国際法に問われる事態となる。当然、各国からの避難の的となるのは目に見えている。

国交大臣「現段階では情報が錯綜しているため断定は出来ませんが…おそらくは…」

総理「事実確認を急いでくれ、それと防衛大臣!直ちに統合任務部隊の編成を急いで進めてくれ!」

国交大臣に事実確認を指示した総理は次に防衛大臣に対して統合任務部隊の編成を命じた。

官房長官「総理、防衛出動の閣議決定までの間ですが、海上警備行動の発令をお願いします!」

総理「事後承認で発令出来るとしても時間がかかるからな…分かっ

た。直ちに承認する！」

その後も各閣僚に一連の指示を行った総理は混乱しそうになるのを必死に堪え、冷静さを失わないように勤めたのだった。

続く

## 第三話

青森沖 第一艦隊旗艦 大和 CIC

首相官邸にて海上警備行動を承認して数時間後の早朝、演習後の補給を行っていた第一艦隊の旗艦大和は横須賀からの一報を受信した。

杉田「韓国が対馬を占領!?!」

秋山「信じられませんね…」

東郷「……………」

杉田と秋山は驚いた顔つきとなり、東郷も顔こそ冷静さを演じていたが内心では彼等二人と同様であった。

東郷「司令部はなんに行つて来ている?」

オペレーター「はっ!演習を切り上げ急ぎ日本海へ向かうようにとの事です!」

東郷からの質問にオペレーターと一緒に送られてきた命令を読み上げた。

東郷「秋山、補給は後どれくらいで終わりそうだ?」

秋山「はっ!補給はあと一時間後に終了予定です!」

東郷「燃料補給が終了次第日本海へ向かう。その間に航路を設定しておいてくれ。」

秋山「了解しました!」

そこまで言うのと東郷はマイクを取り、艦隊全艦へ繋げた。

東郷『旗艦大和より第一艦隊全艦へ!司令部より本艦隊へ命令が下つた。これより第一艦隊は、補給が終了次第日本海へ向かう!任務は今現在のところ《対馬付近の調査》となっているが近日中に防衛出动となる可能性が高い!各員!心して己の任務を全うすることを期待する!』

それから一時間後、補給を終えた第一艦隊は 一斉に転舵し、日本海へ向かうルートへと入った。

東郷「やっぱり津軽海峡を通つて行く最短ルートになるか…」

CICにて策定された航路図を見た東郷はそう呟いた。

秋山「はい、明石海峡は狭いうえに対馬に近すぎますから、通つて



る所を攻撃されたらひとたまりもありません：防諜の面から見ても余り良くはありませんし：かと言って九州を回るルートは時間がかかり過ぎます。」

東郷「だろろうな…大湊に連絡して津軽海峡の警備を行って貰うように打診してくれ。通つてるところを潜水艦に付きまとわれたら叶わん。」

秋山「はっ！既に連絡して向こうからも了解との返信が来ております！」

東郷「流石だ首席幕僚！」

第一艦隊からの打診を受けた大湊方面基地は直ぐに対潜哨戒機と基地所属の護衛艦を出撃させ、哨戒に当たらせた。

結果、第一艦隊は津軽海峡を何事もなく通過し、日本海へ入ることとなった。

首相官邸

第一艦隊が津軽海峡を通過した頃…

外務大臣「総理、やはり韓国大使館は本国からの情報待ちのためノーコメントと答えるばかりで宛になりません。」

総理「やはりか…」

受話器を置きながら報告した外務大臣に総理は半ば予感しつつもその返答だったことに落胆した。

危機管理センターに来て直ぐの頃から韓国大使館に連絡を入れたものの返答はノーコメントの繰り返しであった。

官房長官「総理、マスコミもネットも感づきはじめてます。記者会見を開くべきかと…」

官房長官がそこまで言った時秘書官が部屋に飛び込んで来た。

秘書官「総理！韓国政府が…記者会見を開くと通告してきました！」

総理「なに!？」

直ぐに部屋に設置されているモニターの画面がTVに切り替わった。

セットされた壇上に韓国の大統領が立ち、集められた記者達の前で演説を始めた。

韓国大統領府 青瓦台

大統領「本日ただいまをもって、我が大韓民国は長年日本によつて奪われていた対馬を奪還したことを、ここに宣言します！対馬は古来より我が国の領土でありましたが壬辰倭乱（豊臣の朝鮮出兵）の最に日本に奪われて以来、日本による不当な搾取と圧政を受け続けてきました！それが本日をもって我が軍の精鋭達により解放されたのであります！」

集まった各国の記者達がザワザワと騒がしくなった。

しばらくして記者達が静になったところで韓国大統領は演説を続けた。

大統領「今回の奪還作戦に際して対馬の民間人に少なからぬ犠牲が出ました：しかしながらそれらの責任は全て民間人を盾にすると言う外道な作戦を行った日本側にあります！！また、漁船に扮した工作船が卑劣にも我が国の海軍艦艇を攻撃しようと接近しましたが、勇猛なる我が海軍将兵達はこれを見事に撃ち破ったのであります！」

韓国大統領の演説が段々と感情を伴ったものへと変化して行くのを記者達は感じていたがそれを表に出す事はなく彼等は自らの仕事をこなしていく。

大統領「世界各国はこのような非道を行った日本を断じて許すべきではありません！断固とした制裁を行うべきであります！！我が大韓民国政府はこのような日本の非道な行いに抗議すると共に、日本対して以下の要求を行うものであります！」

そこまで言った韓国大統領は呼吸を整えて日本に対する要求を口にした。

その内容は以下のものであった。

1. 数世紀に渡り大韓民国へ行った非人道的な行いへの謝罪およびこれ等行為を主導した人物、またはその親族の即時引き渡し。

2. 大韓民国への金銭的賠償として日本の国家予算と同額の金額を今後、一定期間支払うこと。なお、支払い期間は大韓民国政府がこれの一切を決定する。

3. 対馬を侵略した事への謝罪、および賠償（上記の賠償とは別個）

4. 対馬の領有権は我が大韓民国政府に有ることを認め、速やかなる不法入居者の退去および返還業務を開始すること。

以上の要求が満たされない場合は遺憾ながら更なる制裁を行う事を排除しない。日本政府の懸命な判断に期待したい。

最後にそう言い残し韓国大統領は記者会見を終了したのだった。

総理官邸

？「ふざけるんじやねえエエエエ!!!」

そう叫びながら机を叩いたのは財務大臣であった。

財務大臣「彼奴らどこまで日本から奪い取れば気が済むんだ!!賠償として国家予算と同額を払え?事実上向こうの財務まで面倒見ろつてか!ええっ!!!国交正常化したときに賠償払っただろうが!!最早対等な国相手にするこじやねえ!ガキのカツアゲじやねえか!!!いい加減にしやがれいい!!!」

総理「落ち着きなさい!!」

財務大臣「!?.....失礼しました.....」

怒りのあまり我を忘れた財務大臣だったが総理の一喝でなんとか冷静さを取り戻した。

総理「財務大臣、気持ちは分かりますが怒鳴ったところで状況が良くなる訳ではないんですから...それこそ相手の思うツボです。」

総理は落ち着きを演じるために自然と敬語で話している自分に気づいていた。

冷静さを装ってはいるが内心は怒りの気持ちが彼の頭の大部分を占めていたからだ。

それでも自らの責務を思いだし顔に出すことを堪えていた。

官房長官「総理、防衛出動の閣議ですが、どう頑張ってもあと2日

はかかります。」

官房長官がもどかしい顔をしながら総理に報告した。

自衛隊を改正し、国防軍となった今でも防衛出動の手続きは従来のままであったためひどく時間がかかってしまうのだ。

改正しようという動きはあったものの野党の反発などもあり手がつけられないでいたのだ。

そのツケが回ってきてい状況であった。

総理「実際に事が起こって初めてその問題点に気づくのは日本人の悪癖かもな……」

総理は無意識にそんな事を呟いていた。

この件が片付いたら防衛出動関連の法案の改正を出さないと……と何処か他人事の様なことが一瞬頭をよぎった。直ぐに現実へと戻って指示を出す。

総理「防衛大臣、その間に対馬奪還作戦の立案を進めるように指示を出しておいてくれ。外務大臣は防衛出動までの時間をなんとかして稼いでくれ。手段は問わなくても良い。なんとしても2日間、韓国にこの事を悟られないようにしてくれ！」

防衛・外務大臣「了解しました！」

二人の返事と同時に部屋にいた者達が一斉に立ち上がり各々の仕事へと取り掛かったのだった。

長い2日間になりそうだな……

そう思った総理は禁煙していた事も忘れ、喫煙所に移り、煙草に火をいれたのだった。

続く

## 第四話

総理からの指示を受けた外務省は結論から言えばその指示を完遂したと言えた。

外務大臣は電話会談で韓国の外相とねばり強い交渉（と言う名の時間稼ぎ）を行い、韓国大使館にはアジア大洋州局第一課の人間が積極的に会談を行い、中には要求を呑んで貰うように首相に働きかけると言った者もいた。

無論、発言した本人にその気はなく、あくまでも時間稼ぎの為の方便に過ぎなかったが…

当然と言うべきか、日本のメディアは日本が韓国の要求を呑むと言う情報を彼等独自のパイプを通じて知り、報道した。

そして、この報道を見た韓国大統領は日本が要求を呑むのも時間の問題だろうと勝手に思いこんだ。

一部の閣僚が不自然に思ったものの、非戦に慣れきった日本が反撃することはないだろうと、そこまで深くは考えなかったのであった。

一方、防衛省の方は対馬奪還作戦の為の準備を大急ぎで行っていた。

とは言え、防衛出動が出る事がほぼ確定状態となっていたため陸海空各部隊は準備をすでに終わらせていた。

特に、水陸機動団の山下 利古里（やました りこり）陸将補（38）は命令が出るや上層部も驚く程の早さで配下の部隊に準備を行うよう指示すると、海軍の輸送隊にも連絡を入れ、受け入れと合流の準備を行って貰うようにするほど気合いが入っていた。

そして統合幕僚監部では対馬の奪還に向けて幾つもの作戦がシミュレーションされ、作成されていた。

そして2日後、現政権の閣僚全員がようやく集まり閣僚の同意を得たとして防衛出動の命令を総理は発令した。

急を要するため、国会の承認を事後とすることとされた。

この場合、国会が防衛出動を認めなかった時は内閣は即座に自衛隊に撤収を命じなければならないが、現在は与党が過半数を取っている

状況の為、さほど問題はない。

更に念には念を入れ野党の一部勢力にも根回しを行っているため例え与党の一派閥が反旗を翻しても過半数を割り込む事はないのは確認済みである。

なにはともあれ、太平洋戦争終結から85年、日本は戦後初めての武力行使を国防軍に命じたのであった。

韓国大統領府 青瓦台

大統領「日本め！この私を騙したのか!？」

日本が防衛出動を決断したことを報道番組で見っていた韓国大統領は怒りを露にしていた。

つい、数時間前に日本の外相からも戦闘を終結させたらそちらの要求する賠償金のいくらかを前向きに検討すると聞いていたからである。

韓国大統領としてこのまま日本は屈服するだろうとタカを括っていたがもの見事にひっくり返しされる形となった。

大統領「おのれ……我が国を侮辱したことを後悔させてくれる!!」  
怒り心頭となった大統領は軍に対して断固日本の反抗を阻止するように命じたのだった。

日本海上 第一艦隊旗艦 大和 CIC

秋山「…司令……」

東郷「いよいよだな……マイクを全艦へ。」

日本海を速度を落としながら航行していた第一艦隊の元に防衛出動の発令が伝達された。

統合幕僚監部からの伝達にCIC内の空気が張り積めたものとなる。

そんな中でも司令官の東郷はその張り積めた空気を毛筋も感じさせずに不適とも言えるような笑みをうかべながら艦隊全艦にマイクを繋げた。

東郷『旗艦大和より、司令の東郷だ。つい先程、総理より防衛出動

の命令が下り、本艦隊にも通達された。戦後初めての防衛出動に緊張し、戸惑いを覚えている者もいるだろう……だが我が国の領土が侵略され、この間にも戦火に怯える国民が我々の目の前にいることを思い出して貰いたい！理不尽な暴力から国民を守るのは我々しかいないと言ふ事を！力でしか分からないのならば力で知らしめる。我々がこれから行ふのはその力の行使である！総員、今までの演習で得た力を十二分に発揮することを期待する！！以上だ。』

東郷の演説により張り積めた空気はなくなり、変わりに熱気がCIC内に、いや、艦隊全艦に広がっていった。

秋山「なかなかの役者ですね……司令。」

東郷「過度な緊張は失敗の元だからな。此ぐらいの役者を演じるのも司令官の仕事だ。さて……進路を対馬に！全艦警戒配置だ！」

秋山「了解しました！」

東郷「ま、万事俺に任しておけ、ドーンとな！」

そう言つて東郷はこれからテーマパークに行く子供のような目をしたのだった。

対馬沖洋上 第七機動艦隊旗艦 金忠善 CIC

朴「なに？倭奴の艦隊を発見しただと!？」

第一艦隊が防衛出動の命令を受信した頃、第七機動艦隊司令官 朴中將が副官の李 翔潤（リ ショウジュン）大佐からの報告を受けていた。

李「はっ！5分前に我が軍の潜水艦が日本海上の遠方で航行する複数の音紋を探知、データ照合の結果、日本艦隊の所属艦のもの可能性高し、との報告を送って来ました。」

朴「目視での確認はしたのか!？」

李「いえ、潜望鏡での確認は危険と判断して、音紋によるデータ照合のみです。艦艇の詳細も遠方過ぎて詳しい事までは不明との事で

した……」

朴「ちつ、役立たずめ……まあ良い、どうせ倭奴の第三艦隊がノコノコと出てきたのだろ……まったくバカな奴等だ。すでに奪還が終わり、防備も完了した対馬にわざわざ頭から飛び込むのだからな……飛んで火に入る夏の虫だ。」

日本艦隊の詳細が不明なことに毒づいた朴であったがすぐに敵は日本海方面を担当する第三艦隊だろうと辺りをつけた。

日本第三艦隊は主力となる第一、第四艦隊とは異なり自衛隊時代の編成をほぼ維持しており、第七機動艦隊と比べて戦力は劣っていると聞いた。唯一、当時と異なるのは中核となるヘリ空母が「いずも型」へと配置転換され、一応は軽空母としての役割を担う位であった。

朴「直ぐに攻撃隊の発艦準備をさせろ！それと空軍にも要請だ！空中給油機と警戒管制機に攻撃隊を補佐させろとな！」

李「了解しました！」

それから20分後、各空母から4機、計8機の攻撃隊が発艦し、日本艦隊へと向かっていった。

朴（ふん、島国の劣等人種が我が国に楯突きよって……身の程を覚えてくれる！）

すでに朴の頭の中には自軍の攻撃により沈む日本艦隊の光景が浮かんでいた。

確かに、第三艦隊が相手ならばこの攻撃隊でも効果はあつただろう……しかし、相手を知らなかったツケをこの後彼等は支払うことになるのであった。

続く



## 第五話

第七機動艦隊から発艦した攻撃隊はそのステルス性を生かして攻撃ポイントにまで順調に飛行した。

日本側はすでに日本海方面に早期警戒管制機のE-767とE-2を飛ばして警戒にあたっていたが地上のレーダーともどもF-35のステルス性をこの時は見破る事が出来なかった。

韓国沖上空 E-737管制機

管制官『管制機より攻撃隊、攻撃ポイントに到達した。全機攻撃を開始せよ。敵艦隊の数が想定よりも多い、気をつけろよ』

韓国本土の高高度にて管制を行っているE-737警戒管制機が攻撃隊に指示を出した。

レーダーには日本艦隊の輪形陣が写されているが詳細はこの時も未だ不明であった。この時、管制官は日本の第三艦隊に護衛艦隊のフリゲート（護衛艦）が随伴しているものと勝手に判断してしまっていた。

日本海上 日本艦隊攻撃隊 隊長機

隊長「全機、SSM発射準備！いいか？ウエポンベイが開くと同時に我々は向こうのレーダーに探知される！気を引き締めろよ！」

攻撃隊隊長が指揮下の7機に注意する。

いくらステルス機と言えどウエポンベイを解放した状態ではそのステルス性は無意味となる。当然、敵からのレーダーには丸見え状態となる。

攻撃隊パイロット「「「「「了解！「「「「」

隊長「目標ロックオン！全機FOX3！」

次の瞬間8機の機体から各2発、合計16発のハープーン対艦ミサイルが発射された。

第一艦隊旗艦 大和 CIC

突然のレーダー照射の警告音と共にレーダーに表示された8つの

輝点に大和のCICは騒然となった。

オペレーター1「レーダーに反応！2時の方向距離70キロに高速飛翔体を探知！数16！」

オペレーター2「レーダー照射反応！ロックオンされました！」

オペレーター3「E-767より入電！敵編隊を探知！高速飛翔体の近く！！数8！」

東郷「全艦、対空戦闘！」

直ぐ様東郷が対空戦闘の命令を下す。

杉田「対空戦闘！砲雷長！落ち着いて狙え！」

砲雷長「了！！」

大和のVLSが開き、対空ミサイルの発射準備が素早く行われる。同時に僚艦も同様に発射準備が進められる。

各艦はシステムによりデータリンクされ、それがCICのモニターに写しだされる

砲雷長「SM-2発射準備よし！」

オペレーター「僚艦の高雄、那智、共に準備完了！全艦連動！」

砲雷長「発射始め！サルヴォー！！」

旗艦大和以下合計3隻のイージスシステム搭載艦から発射された対空ミサイルが敵の対艦ミサイルへと向かい飛翔する。

オペレーター「全艦発射！対空ミサイル16基、目標迎撃コースに！」

オペレーター「命中まで後10秒！」

8、7、6、5、4、3、2、1…

オペレーターが0秒を叫ぶと同時に双方のミサイルの反応の表示がモニターから消えた。

オペレーター「撃墜！敵対艦ミサイル全基撃墜を確認！」

東郷「よし！よくやった！引き続き警戒を厳に！！」

16発もの対艦ミサイルの全基撃墜に大和CIC内部に安堵の空気が僅かに漂った。

オペレーター「敵編隊7機！反転して行きます！」

東郷「……7機……？」

オペレーターからの報告に東郷は疑念を持った。

東郷「敵編隊は8機とあつたな？」

オペレーター「は、はい。E-767からの報告では確かに8機と……」

秋山「発射された対艦ミサイルは16発。最初の報告が確かなら全機で2発ずつ発射した計算になります。」

東郷「だが反転していった敵編隊は7機……と言う事は1機だけ別行動をとっている可能性が高いな……」

東郷は直ぐに全艦に警戒を強めるように指示を出した。

敵機が対艦ミサイルを射ち尽くしていたとしても近付いて来る可能性が高い以上、そのままにしておくことは出来ないのは自明の理だ。

例え対空ミサイルでも船体に損傷を与えることは難しくとも電子系統ならばそれで十分だからだ。

現代の艦船において電子機器の損傷はそのまま戦闘不能へと直結する。

撃沈せずとも戦線離脱させるならば対空ミサイルでも事足りる。

先ほどまでの安堵した空気は既になくなり再び重苦しい空気がCICに充満していた。

時間を少し巻き戻し、対艦ミサイルが撃墜された頃、韓国の攻撃隊では……

管制官『対艦ミサイル全基撃墜！攻撃は失敗！全機反転、帰還せよ！』

隊長「くっ！……全機反転！母艦へ帰投せよ！」

攻撃が失敗したことを管制機から受けた攻撃隊隊長は全機に帰還を命じた。しかし……1機が反転せずそのまま飛行を続けた。

隊長「2番機！聞こえなかったのか!?反転し帰投せよ！」

しかし隊長の命令を2番機のパイロットは拒否した。

2番機パイロット『隊長！敵艦隊の詳細は依然として不明のままです』

す！本機が敵艦隊に肉薄し、詳細なデータを送ります！」

隊長「駄目だ、危険過ぎる！戻れ!!」

2番機パイロット『このままなんも手柄無しに帰ればあの司令のことです！隊長が無能だと糾弾するのは目に見えています！』

隊長『馬鹿野郎！俺の悪口なんざどうでもいいんだよ！そんなこと心配してねえで戻れ!』

2番機パイロット『これより無線を封止します、オーバー』

そこまで言って2番機パイロットは無線をシャットアウトした。

隊長「クソツ！あのバカ!……」(死ぬんじやねえぞ!)

隊長は心のなかで2番機の無事を祈りつつ、残った僚機を率いて帰路についた。

時は戻って…

旗艦大和CIC

オペレーター「敵機発見！ E-767のレーダーが捕捉！超低空です!!此方からのレーダーでは捕捉不能!」

東郷「迎撃用意！近接防空戦闘!」

もはやSM-2では対処は不可能だ…そう判断した東郷は近接防空を指示した。

杉田「はっ！近接防空戦闘！各速射砲およびCIWS、RAM発射準備!」

杉田艦長の指示で大和の舷側に装備されている速射砲、とCIWS、RAMが敵機に砲身を向けた。

攻撃隊2番機

2番機パイロット「見えた！無線封止解除！これよりレーダー波を照射！管制機にデータを送る!」

無線封止を解除したパイロットはE-737にこれよりデータを送ることを伝える。

旗艦大和C I C

オペレーター1「敵機よりレーダー波！ロックオンされました！」  
オペレーター2「僚艦からも同様にロックオンされた模様！」

秋山「司令！恐らく敵機は我が艦隊の詳細をレーダー照射で調べようとしているかと思われます！」

東郷「ストーカー行為は感心しないな！迎撃始め！」

杉田「撃ち方始め！」

砲雷長「撃ち方始め！！」

東郷の命令により各砲門が一斉に火を吹き始め、空中に黒い火花をあげる。

攻撃隊2番機

2番機パイロット「全艦にレーダー照射完了！管制機！データは受け取ったか!？」

管制官『：受け取った！解析に移る。直ぐに離脱しろ！』

2番機パイロット「了解！これより離脱する！空中給油機を手配していくてくれよ！」

しかし彼の注文はこの直後に不要となった。

彼の機体に大和から発射されたRAMのミサイルが直撃し、彼の身体もろとも粉微塵に粉碎したからであった。

E-737管制機

管制官「2番機ロスト！撃墜されたもよう！脱出の有無は不明ですが恐らく…」

機長「くっ！…」

2番機の撃墜にE-767の機長は一瞬悔しいさを滲ませた。あの高度で被弾したのならば生存の可能性は低い…しかし、彼から送られたデータを解析する事が彼の死を無駄にしないことだと自分に言い聞かせた。

機長「データの解析結果はどうだ！」

管制官「今出ます！……出ました！敵艦隊の編成は：戦艦1、空母1、ヘリ空母1、イージス巡洋艦2、イージス駆逐艦2、汎用駆逐艦9……これは：第一艦隊の編成と一致します！」

機長「直ぐにデータを第7機動艦隊へ送れ！参謀本部にもだ！」

判明した日本艦隊のデータは直ぐに第7機動艦隊と参謀本部にも届けられ、一様に驚愕する事になるがそれは別の話。

旗艦大和CIC

オペレーター「敵機撃墜を確認！」

敵機の撃墜を確認したCIC内は眼前の脅威が無くなってもどんなよりとした空気が漂っていた。

戦後80年近く今まで実際に敵の兵士を殺したと言う事実をいやが上にも感じさせられていたのだ。

東郷「……………」

秋山「……………」

東郷も秋山もその空気に吞まれ沈黙していた。

その沈黙を破ったのはCIC内で一番の年長者であった杉田艦長であった。

杉田「司令、撃墜した韓国機パイロットの搜索を具申します。」

東郷「分かった、許可する。」

杉田「司令、お気持ちはお察します。どうかその実感は忘れることのないように……」

東郷「杉田教官には叶いませんね……」

杉田「術科学校以来の付き合いですから……」

東郷と杉田はかつての江田島の術科学校にて生徒と教官の立場からの付き合いであった。

首席幕僚の秋山も学生時代は東郷の後輩として長いこと彼の補佐を続けている。

それはともかく……

10分後、旗艦大和から2機のヘリが発艦し、撃墜現場周辺を搜索した。

結果、現場付近にてF-35の残骸と遺体の一部を発見し、生存は

絶望的としてこれ以上の搜索を打ち切ったのであった。

続く…

## 第六話

総理官邸

第一艦隊が韓国機を撃墜したことは直ぐに総理官邸へと送られ、総理以下閣僚の耳に入った。

総理「韓国機を撃墜!？」

官房長官「それで被害は!？」

官房長官が第一艦隊の被害を心配したが直ぐに防衛大臣から被害無しと返事が帰ってきたため胸を撫で下ろした。

しかし直ぐにその後の報告に頭を悩ませる事となった。

防衛大臣「しかし、撃墜した機体のパイロットは死亡が確認されませんでした。戦後初の戦闘員の殺害となりました…」

防衛大臣から韓国軍兵士の死亡を聞いた総理はこの事を公表するべきか悩んだ。

総理「官房長官、韓国側はこの事を公表すると思うかね？」

官房長官「……正直判断に悩みます。現状韓国側が戦略的に勝利を納めている状況です。韓国政府からすれば今回の件は勝利に酔いしているところに冷水をかけるようなもの…通常であれば公表は控えようとする心理が働きますが…今の韓国政府からすると日本側が奇襲を仕掛けて来た等と言ってプロパガンダに利用する可能性も捨てきれません。」

官房長官の推測に総理はあり得るかもしれないと思った。もし、韓国側がプロパガンダに利用するとなると国内の反対派が勢いを増しかねない。現状でも反対派のデモが国会議事堂と総理官邸前に集まってデモを行っているのだ。下手をすればそのまま暴動にまで発展しかねなかった。

そうなると此方が何も公表しないのは後々不利になると思われた。

総理「此方が先手を打って公表すべきだな…」

その言葉に他の閣僚達から不安の声が上がった。そうすれば第一艦隊の行動がばれてしまうだけでなく国内の不安を不必要に煽るのではないかと懸念が出た。



総理「諸君の懸念は理解しているつもりだ。だが、ここで国民に隠し事をしていけば国民は政府を信用しなくなるだろう：そうすれば今は沈黙している野党も政府の責任を追求するのは目に見えている。最悪、内外の敵を一度に相手しなければならなくなってしまふ：その状況は避けねばならん。」

総理の決断により公表する事が決定し、直ぐ様会見が行われる事となった。

会見は総理が直接行った。

まずは対馬が侵攻される事を察知出来なかった事への陳謝、そして交渉での解決が出来ていないことを説明し、その後第一艦隊が韓国軍の攻撃を受け応戦したこと、その時に韓国軍機を撃墜したこと、そして撃墜した機体のパイロットの生存が絶望的だとのことを説明した。

当然というべきか記者からは政府は戦闘を拡大するのか、憲法に違反しているのではないのか、等といった質問が飛んできたが、総理は冷静にそれらの質問に時間が許す限り答えていった。

そして最後に国民の皆様はデマ等に惑わされる事なく国民は冷静に行動して頂きたいと言って会見を終えたのだった。

時間を少し巻き戻し総理の会見が準備されていた頃、韓国側では：

韓国大統領府 青瓦台

大統領「日本め！無駄な足掻きをしておつて！そのまま我が軍の正義の炎に焼かれておれば良いものを!!」

自軍の攻撃が不発に終わった事を知った韓国大統領は怒り狂っていた。そして国防部長官（防衛大臣相当）と合同参謀本部議長（制服組トップ）を呼び出して新たな命令を出した。

大統領「全軍へ壹岐群島の攻撃準備を命じろ！島国の劣等人種に身の程を教えてやれ!!」

大統領は今までの冷静さをかなぐり捨て叫んだ。

大統領が最初の演説のときに発言した『更なる制裁』とは壹岐群島

の攻撃であった。

対馬と九州の間くらいに位置しており、およそ2万人が暮らしているおり、日本国防軍の監視所も置かれている島であった。

大統領はこの島の日本軍施設だけでなく、民間人を意図的に攻撃する事で日本政府に更なる圧力を掛けようと考えていたのだ。

国防部長官「かしこまりました大統領閣下。」

参謀本部議長「了解しました。しかしこれ以上の戦力の抽出は北朝鮮（北朝鮮）の備えもあり、難しいところですが：如何致しますか？」

直ぐ様返事をした国防部長官とは違い合同参謀本部議長は返事こそしたものの懸念材料を口にした。

韓国の軍は基本的に対北朝鮮を想定して戦略、装備、戦術を構築してきた。海軍こそ、ここ数年で対日本を意識して拡充してきたものの、陸空は日本との戦闘を意識した訳ではなかった。

が、大統領はそれを一蹴した。

大統領「構わん！北韓も日本が憎いのは同じはずだ！第一、我が朝鮮民族が南北に分断される事となったのは元はと言えば日本の責任なのだ!!その日本へ懲罰を行っている今、彼等が此方へちよっかいを出して来る理由は無いはずだ！」

大統領のこの言葉に合同参謀本部議長はそれ以上は反論せずに再度了解しましたと答えるのだった。

## 旧作

### 第1話

10月15日 対馬沖

合計16隻にもおよぶ艦隊が航跡をなびかせていた。

艦尾に掲げた旗には旭日旗が揺らめいておりこの艦隊が日本海軍の所属であることを示していた。

旗艦大和CIC

？「秋山、これまでの状況を整理してくれ」

そういった細身の男は若く二十代後半であった。

彼が日本国防海軍第一艦隊司令官 東郷毅(とうごう つよし)二等海将(28)である。

そして、東郷に呼ばれたのは中肉中背で眼鏡を掛けた男で東郷の首席幕僚、秋山 敬一郎(あきやま けいいちろう)一等海佐(26)である。

二人とも若いながらその非凡な才能によつて上りつめた実力の持ち主である。

また、この二人は兵学校の先輩と後輩の間柄であり、よく二人で無茶をした仲である。

とはいっても、東郷の無茶に付き合う秋山は大抵その後片付け役であり、いわゆる苦勞人であったが…

それでも、この二人が作戦を指揮すると演習では高い勝率を取ることから名コンビと言われている。

話を戻す。

東郷に説明を求められた秋山はこれまでの経緯を話しはじめる。

秋山「はつ、先日の10月14日の深夜0200に対馬の駐屯地から『大多数ノ部隊が上陸セリ』との緊急入電が入りその後通信が途絶えました。夜が明けた0630に九州の空軍基地から偵察機RF-4Eが緊急発進し強行偵察を行った結果、韓国軍によるものと結論さ

れました。これを受けて我が国の首相は秘密裏に交渉による解決を行おうとしましたが韓国側はこれを拒否しました。さらに1000に韓国政府は記者会見にて『今回の件は全て日本側に非があり我々は日本によって奪われた国土を回復したにすぎない。よって日本側の主張は受け入れられない。我が韓国政府は日本に対し謝罪と賠償を要求する』との声明を発表しました。これにより交渉による解決は不可能と首相は判断。我が艦隊に対し対馬奪還作戦のための出撃命令が下りました。」

秋山の説明が終ると東郷は楽しみにしていた遠足が中止になった子供のような顔つきとなる。

東郷 「そして現在我々はその対馬北東沖にて作戦発動まで待機を命じられているわけだ。まったく、今日は娘の誕生日だって言うのに……」

そう言いながら東郷はため息をついた。

彼にはアメリカ産まれの子との間にできた一人娘がおり大層溺愛していた。そして、今日がその誕生日であった。

当然、盛大に誕生日パーティーをやる予定だったが中止となつてしまったため彼のご機嫌は非常に悪かった。

秋山 「真希ちゃん、今年で10才でしたね、……お気持ちは解りますが今は目の前のことに集中しましょう。」

東郷 「そうだな……秋山、敵艦隊の情報を頼む。」

彼とて軍人の一人、すぐさま頭を切り替える。

秋山 「はっ、現在敵艦隊の主力は対馬の北方に展開しています。内訳としては、軽空母2隻、イージス駆逐艦6隻、汎用駆逐艦12隻、フリゲート艦8隻が確認されています。また、別動隊として駆逐艦1隻、フリゲート艦4隻が対馬西方沖に展開しています。それ以外は確認されてはいませんが恐らく潜水艦が複数潜んでいるものと思われまます。」

それを聞いた東郷は少し目を細めた。

東郷 「戦力的に見て、西方に展開しているのが第3艦隊だろう……この艦隊は位置的に見ても短期間は無視して問題は無い。むしろやつ

かいなのが…」

秋山「はい、北方に展開している第7機動艦隊です。」

第7機動艦隊は韓国海軍最大の戦力を持つ艦隊で当初は第7機動戦団と呼称されていたが規模が拡大したことにより名称を変更したのだ。

東郷「この艦隊を俺達第一艦隊だけで無力化しなければならないのか… 何とも面倒なことを上は押し付けるな…」

秋山「仕方ありません。佐世保の第二艦隊は中国の警戒のため動かせませんし、第四艦隊は全艦が 定期メンテナンス中ですから。むしろ韓国側はそれを狙ったのでしょうか。」

東郷「圭子さんの艦隊は陸軍の増援の護衛と援護のため別行動中だものな…」

南雲 圭子（なぐも けいこ）二等海将率いる日本第三艦隊は現在揚陸艦部隊の護衛のため別行動中であった。

秋山「どうします長官？数のうえではこちらが不利です。また、航空機による攻撃もあの艦隊の前では効果は薄いかと思われませんが…」  
秋山の懸念はもつともであった。

真つ正面から仕掛けたのでは韓国艦隊の方が数は上であり長期戦になつてしまえばこちらが不利であった。

また、航空機による攻撃も軽空母の艦載機と空軍の直衛に加えイーJス艦を6隻を有するのでは生半可な航空機の投入は自殺行為である。

しかし、その状況を聞いてもなお東郷は愚痴こそこぼすことすれ、悲観になつたというようには見えなかつた。

逆にこの状況を楽しんでいるかのように笑みを浮かべてこう言いはなつた。

東郷「ま、安心しろ。この程度なら不利のうちにも入らん。皆俺に任せろ。ドーンとな」

傲慢、蛮勇とも受け取れるその言葉にはしかし、確固たる信念が宿っていた。ここにいる誰もがその言葉に疑問を持たなかつた。

それが彼への信頼の証でもあつた。

太陽の明かりが艦隊を照らしだすなか果たして東郷はどのような  
して敵艦隊を相手取るのだろうか。

その問の答えを出さぬまま日本海の荒波と風だけが艦隊を揺らし  
見守っていた。

## 第2話

東郷と秋山が話し合っていた頃、韓国艦隊でも日本艦隊に対する対策が話し合われていた。

韓国海軍第7機動艦隊旗艦 金 忠善

？「何、倭奴（ウエノム）共の艦隊を発見したただと？」

不機嫌さを隠そうともせずそうに言いはなつたのは中肉中背の口ひげをはやした男、第7機動艦隊司令官の朴 丙仁（ぱく へいじん）中将（56）である。

副官「はい、つい先程我が軍の潜水艦が複数の推進音を探知、その後潜望鏡にて確認したところ日本艦隊であったとのこと。それ以外からの潜水艦からも同様の報告があることから信憑性は高いものかと…」

この潜水艦は東郷達も察知していたが敢えて取り逃がしたのである。理由は勿論韓国艦隊を自分達の所へ誘き寄せるためである。

朴「くそ、偵察衛星が使い物になっていればこんな手間はかからなかったものを…」

朴中将は不機嫌さをさらに強めて呟いた。

この時期、韓国にも偵察衛星はあったのだが日本側がそれを放っておくはずがなく既にハッキングを仕掛けて機能を停止させていた。そのため韓国軍は日本艦隊の接近に気づくのが遅れてしまったのだ。

朴「まあいい、どちらにせよ倭奴の艦隊は殲滅する予定だったのだ。それが少し早まっただけのこと…」

朴中将は自らの配下の艦隊によって海の藻屑となるであろう日本艦隊の光景を想像し頬を吊り上げた。

朴「敵艦隊の戦力はどれくらいだ？」

副官「は、戦艦1、空母1、ヘリ空母1、イージス巡洋艦4、イージス駆逐艦2、汎用駆逐艦7、の合計で16隻になります」

司令官の質問に間を置かずに副官は答えた。

それを聞いた朴中将は顔をしかめる。

朴「空母はともかく時代遅れの戦艦を持つてくるとはな…いったい

なぜ倭奴共はあのようなものを建造したのか…まあ、島国の劣等人種共の考える事など理解する気もないがな」

朴中将は日本人への差別意識を隠そうともせず言いはなつたが副官はそれを無視した。

副官「敵艦隊は現在、本艦隊へ向けて針路を固定しています。いかがいたしましたでしょうか？」

朴「知れたこと、奴等がこちらへ向かつて来るのならば叩き潰すのみ!!全艦に通達、ただちに針路を1ー7ー0へ変更!倭奴共の艦隊を迎撃する!!」

副官の間に間髪入れず朴司令官は命令をだす。

副官「しかし司令官、全ての艦を出すと上陸部隊の援護が出来なくうえにこの海域の警戒網に穴が開いてしまいますが…」

朴「上陸部隊の援護は空軍の連中に任せておけばよい、警戒網ならば潜水艦と第3艦隊のみで充分だ。これは決定事項だ!!よいな!!」

副官の懸念にも耳を貸さずに朴司令官は押し通した。

これが後に重大なミスとなることをこのときの彼は知るよしもなかった：

朴中将の命令を受けた第7機動艦隊はそれぞれの軽空母を中心にして二個輪形陣を組むと日本艦隊へと進路を向けた。

一個輪形陣につき軽空母1、イージス駆逐艦3、汎用駆逐艦6、フリゲート4、と言う陣容である。

朴「見ておれ倭奴共め、貴様達のオンボロの鉄屑艦隊などもの見事に粉碎してくる。我が艦隊の力を思いしるがよいのだ…ツフハハハ！」

このとき韓国艦隊のほとんどの者達が自分達の勝利を信じて疑わなかった。

しかし、それはただの慢心であつたということを知れば等は思い知らされることとなるのであつた…



### 第3話

後に対馬沖海戦と名付けられる戦いが幕をあけた。

しかし最初に火蓋を切ったのは水上ではなく水面下であった。

韓国艦隊後方海面下 深度200メートル 潜水艦 雲龍

聴音手「敵艦隊、速度を上げました。本艦の前方12時方向、速力25ノット、二群に別れて航行しているようです」

聴音手の報告を聞いた雲龍艦長 田中雷蔵（たなか らいぞう）二等海佐は悔しい顔を隠さない。

田中「くそ、せっかく敵艦隊を見つけたつてのに、なにもしねえなんて…これじゃ潜水艦の意味が無えじゃねえか、いくら作戦だからって納得出来るかよ…」

今作戦において潜水艦部隊は対馬周辺の偵察と警戒が主な目的であり秘匿性を保つため敵艦隊への攻撃は別命がくるか自衛の目的以外の状況を除いて厳禁とされていた。しかしそんな状況は闘将タイプの彼にとつてはとてつもなく苦痛であった。

副長「仕方ありませんよ艦長、これも潜水艦の任務の一つですよ」  
生真面目な副長がそう言つて田中をたしなめた。

この二人、性格が真逆な割にはコンビとしては長い付き合いのため田中も彼の言うことには素直に聞く。

副長「それに、ここで我慢して後で敵艦隊を叩けばその分すつきりしますよ。ですからここは待ちましょう」

田中「そ、そうだな、そいつは気持ちがいいぜ！」

副長（ほんつと単純な方だ…こう言えば簡単に乗っかるんだから…）

訂正、副長がそのように誘導していたようだ…

ともかく、そのようなこともあり雲龍は韓国艦隊を追跡することとなった。

無論気付かれないように無音航行を行っていた。

しかし、追跡を始めてから1時間後、聴音手が別の反応を捉えた。

聴音手「艦長、本艦の右舷後方に推進音を探知、数1、速力15ノット

トで接近中!!」

田中「総員戦闘配置!!」

聴音手の報告を聞いた田中はすぐさま戦闘配置を命じた。

田中「発射管1番、2番、5番、6番魚雷装填!・3番、4番デコイ装填急げ!!」

2分とたたずに全員が配置を完了し発射管に魚雷とデコイが装填される。

田中「聴音手、敵艦の艦種を知らせ」

聴音手「は、艦種は潜水艦、音紋から推測して214型の模様です。現在、15ノットで接近中です。距離6000」

田中「水上艦隊の護衛かそれとも哨戒の別行動の奴か…」

副長「水上艦隊の護衛にしては距離が開き過ぎてます。おそらく哨戒の潜水艦でしょう、動きが無いことからするとまだ気付いてない可能性もありますが…」

田中「いや、気付いてないと見せ掛けて至近距離でドカンって手もある。いくら韓国軍が海戦が苦手だとしてもそれぐらいの知恵はあるさ…それにここまで来て気付かないってのも逆に不自然だろ…」

副長の言葉はこの場をやり過ぎすことを言外に示していたが田中はそれを察しつつも否定する。

田中「とにかく、この場合は先手必勝、サーチ&デストロイだ。距離が4000を切ったら魚雷を…」

そこまで言ったところで聴音手が声を荒げた。

聴音手「敵艦から発射管注水音!!気づかれました!!」

田中「ちつ、むこうが早かったか!?!」

このとき田中は内心もつと早く発射命令を出すべきだったと一瞬後悔した。しかし、それをいつまでも引きずるほど彼は無能ではなかった。

聴音手「敵艦魚雷発射! 数4、雷速50ノット、こちらへ真っ直ぐ突っ込んでくる!」

田中「こつちもすぐに魚雷をぶっぱなせ!!聴音手、敵の魚雷が2000を切ったら知らせろ!!」

聴音手「りよ、了解」

怒鳴っているがそれでも彼は慌てた様子ではなくむしろ気分が高揚しているかのようであった。

水雷長「1番、2番魚雷発射（シユート）!!」

雲龍の発射管から二本の魚雷が発射され、すぐさま方向を敵の潜水艦に向ける。

その間にも敵の魚雷は自分たちの元へ近づいてくる。

聴音手「敵魚雷との距離4000：4500：3000：3500  
…」

聴音手が敵魚雷距離を読み上げる。距離が縮まる度に緊張が高まっていく、田中自身も平気そうな顔をしているが、握りしめた掌は汗がにじんでいた。

聴音手「距離、2000!!」

田中「今だ！デコイ発射!!」

水雷長「デコイ発射（シユート）！」

艦首魚雷発射管からまたしても2本、今度はデコイが発射される。そしてすぐさま左方向へ転進する。

田中「面舵40、最大戦速!!」

デコイが転進したのを見計らって田中はデコイとは逆の方向へ舵を切った。

聴音手「敵の魚雷、4本ともデコイの方向へ向かっていきいます…爆発音を確認、迎撃成功です」

田中「よし、こつちの魚雷はどうだ？」

魚雷の迎撃成功にひたる間もなく田中は自分たちが発射した魚雷の状況を問う。

聴音手「現在敵艦へ真つ直ぐ向かっていき、いえ、左方向へそれていきます…爆発音を確認、攻撃失敗です。」

田中「ちっ、やっぱりそんな簡単にはいかねえか…」

こちらの攻撃が失敗したことに悔しさを隠さないがそれでも頭の中ではどうやってこの局面を乗り切るかをシミュレーションしていた。

そして

10秒ほどたったとき

田中「よし、これなら…」

副長「なにか思い付かれたので？」

副長が不敵な笑みを浮かべるのを見て副長が問うが田中は曖昧な事だけを言ってお茶を濁した。

田中「まあな。少し無茶するから覚悟しとけよ。」

副長「艦長が無茶をするのはいつものことでしょうに…」

副長は呆れながらもその顔には笑みが浮かんでいた。

田中「5番、魚雷発射、6番、今から30秒後に発射！発射の後最大戦速で取り舵50！ダウントリウム10だ!!」

田中の命令が即座に実行される。

そして：

聴音手「敵艦から再度魚雷発射音!!数1、雷速50、60秒後に魚雷と交差予想ポイントを通過します」

聴音手が敵の魚雷と自らの魚雷が交差するであろうポイントまでの時間を告げる。

その報告に副長はふと疑問符がついた。

副長「おかしいですね…214型は魚雷発射管が8本装備しているはず、今まで放ったのを合計すると7本。まだ残りが1本あることになりません。なぜ発射しないのでしょうか？」

副長の言うとおりの214型の魚雷発射管は蒼龍型よりも2本多い8本を装備している。今まで放った魚雷はデコイも含めば7本であり残り1本がまだ発射されていないことになる。こちらと同じく時間差をつけて発射するにしても既に差が開きすぎておりあまり意味をなさない。

その疑問にを横目に田中は勝利を確信したかのように笑みを浮かべた。

そして、その時がきた。

聴音手「魚雷交差まで10秒、7、6、…3、2、1!!」

田中「5番魚雷自爆させろ!!」

水雷長「はっ!!5番魚雷自爆!!」

田中が命じると同時に水雷長が5番魚雷を自爆させる。

自爆した魚雷はほぼ同じ地点にいた敵の魚雷をも巻き込み爆発する。2発もの爆発によって一時的にソナーも使用が困難となった。

敵の214型もこの爆発によってソナーが使えなくなり状況を把握するのが遅れた。

そして、自らの状況を悟ったときにはもはや手遅れであった。

雲龍が放った最後の魚雷が突如として彼等の目の前に現れたのだ。

214型が慌てて残った 2本 のデコイを発射するもそれは実を結ばなかった。

艦首に命中した魚雷は214型に搭載されていた魚雷に誘爆し、その破壊力を敵艦ではなく自らの艦へと向けた。

214型は一瞬にして艦全体を破壊し尽くされた。

唯一の幸運は乗組員全員が海水に溺れて苦しむことなくその生涯を閉じた事ぐらいだろう。

聴音手「敵艦の爆発を確認…更に圧壊音を確認…撃沈を確認しました…」

聴音手が敵の撃破を報告するもその声は冴えなかった。

初めての实战による興奮と一歩間違えば自分たちがあの運命になつていたかもしれないという恐怖心がない交ぜになつた声であった。

田中「なにしんみりしてんだテメーら。俺達の仕事はまだ終わってねえぞ。悲しむのは母港に帰ってからだ!!」

そんな中でも田中は敢えて乗組員に喝を入れる。

この先この状況すら生ぬるく感じるほどの出来事が待ち構えているのだ。

ここで士気を下げるのは自らの死を早めることとなるのだ。

無論、田中も喝だけではこのしんみりした空気を変えることは出来ないことを承知していた。それゆえ彼は笑い誘うよなこと言つてのけた。

田中「それに、こんなところでメソメソしてたんじゃまた東郷のヤ

ローに笑われるぞ！アイツの乗艦を演習でやる前に沈んでんじや末代までの恥になるぞ」

副長「艦長、その沈むはどちらの意味でしょうか…気がですか？それとも海にですか？」

副長もそれを理解しているのか彼の話しに乗った。

田中「そりゃーお前、両方の意味を持たせたんだよ。どうだうまかったら？座布団くれてもいいんだぜ♪」

田中のその言葉に副長は即座に突っ込んだ。

副長「別にそれほどどうまくありませんし、座布団もありませんよ…というよりも今の答えだと歌○師匠座布団取りますよ…山○君も納得して取りますよ。」

田中「なんだとテーマ!!」

突然始まった漫才にクルー達は思わず笑ってしまう。

やがてクルー達の間には先程のどんよりとした空気はなくなっていた。

田中「よし、漫才はこれまでだ。戦闘配置解除、取り舵40、敵艦隊の追跡に戻る！」

それを見計らって田中は敵艦隊の追跡再開を指示した。

雲龍は再び進路を敵艦隊へ向け、その艦体を暗い海へ溶け込ませていった。

副長「そういえば艦長」

田中「なんだ副長？」

副長「どうして最後の攻撃のとき214型は魚雷を一本だけ発射したのでしょうか…？まだ後魚雷は1本残っていたはずですが…」

ふいに副長はそんな質問をした。

その間に田中は論ずるように答えた。

田中「簡単だ、アイツは1本しか打たなかったんじゃない。打てなかったんだ」

副長「と聞いてますと…あっ!？」

そこまで言われて副長は気がついた。

副長「敵艦は最初に撃った4発しか魚雷を入れていなかった…残り

の4本にはデコイを入れていた…」

田中「そして、急いで再度魚雷を装填したが間に合わず1本しか撃つことが出来なかった…敵が最初に4発全てを撃つたのはミスだったな」

副長「いつから気づいていたのですか?」

田中「俺達がデコイで魚雷を回避したとき奴はなにもせずじつとしていた最初は爆発の音で探知出来なかったと思っていたが…それにしては長すぎると感じてな、そして俺達が2度目の魚雷を撃つたとき慌てたように魚雷を撃つたときに確信したんだ。敵にはもう魚雷を撃てないってな」

副長「なんともまあ…あの短時間でそこまで気がつくとは…(これが野生の勘というものなのかな…)」

田中「聞こえてるぞこのヤロー!!」

またしても二人の漫才兼O・H・A・N・A・S・I.が始まり司令室内は再び笑いが起こったのであった。

それから30分後

聴音手「艦長、敵艦隊に変化があります。速度を30ノットに上げて、陣形を変えました。」

聴音手の報告を聞いた田中はいよいよよかと呟いた。

これより舞台は海中から海上へと場所を移動する。

田中「お手並み拝見といくぜ。東郷司令…」

自らのライバルであり師匠でもある東郷の名を上げて田中は独り言を呟いたのであった。

## 第4話

目の前の光景を見なければおそらく隕石か何かが墜ちて来るのではないかと思うような轟音が響いていた。

韓国艦隊旗艦 金 忠善

朴「攻撃隊全機発艦!!」

韓国艦隊の軽空母2隻から次々とF-35Bが発艦していく。

総数で30機。1隻につき15機つつ、全体の半分である。日本艦隊を叩くには十分な数である。

更に：

副官「空軍より連絡が来ました。10分後にF-15K戦闘機隊が14機合流することです」

朴司令官は空軍にも部隊の派遣を要請しこれを受けた空軍司令部は攻撃隊の援護として制空装備のF-15を派遣した。

朴「よし、先手は我等が取った。後は倭奴の艦隊が殲滅されたという報告を待つのみ…」

このとき彼の中では既に勝利は決定したものと確信していた。

後に、生き残った乗組員の証言によると、彼は終始日本艦隊の実力を過少評価している発言をしていたとされている。

朴(これで倭奴の艦隊を殲滅し対馬奪還作戦を成功させたあかつきには私は英雄としてソウルを凱旋することになる。そうなれば昇進も思いのまま、いや、それどころか大統領の椅子すらも夢ではない) そのような野望を朴は抱いていたが、この後彼はその野望どころか自らの命が潰えることになることをまだ知るよしもなかった。

同時刻 日本艦隊旗艦 大和

秋山「東郷司令、雲龍より暗号受信、『英雄ハ矢ヲ放ツタ』です」

東郷「よし、全艦戦闘配置！ 豊臣に通信、『英雄たちのおもてなしを開始せよ』以上だ」

英雄とは無論韓国艦隊のことを指す。そして豊臣とは第一艦隊の航空母艦赤城のことを指す。



韓国艦隊の旗艦がかつての豊臣軍から寝返った武将の名前から取られたことを考えると皮肉である。

空母赤城 艦橋

艦長「迎撃隊、発艦開始！」

赤城のカタパルトからF-3B震電が次々と発艦していく。

10分とたたずに迎撃隊40機が赤城から飛び立った。

旗艦大和

秋山「迎撃隊、全機発艦完了しました。しかし宜しかったのですか？艦載機を全て迎撃に振り向けてしまつて…」

秋山が懸念とするのも無理はない。今回の迎撃には赤城に搭載されていたほぼ全ての戦闘機を充てている。

敵が間髪いれずに第二次攻撃隊を放つてくれば、迎撃隊は弾薬がつき、最悪エアカバー無しでの対空戦闘を余儀なくされることとなるのだ。

しかしその秋山の懸念も東郷は 首をふつた。

曰く、敵艦隊は最初の一撃で勝負をかけてくる可能性が高い。それならばその最初の一撃を叩き、出鼻をくじくのが得策であるというのだ。

東郷「なーに、大丈夫だ。アイツらならちやんとやってくれるさ…」  
そう言つて彼は飛び立った迎撃隊を見つめていた。

迎撃部隊隊長機

柴神「何度見てもやはり壮観の一言であるな…」

迎撃隊の隊長 柴神 良平（しばがみ りょうへい）一等海尉はそう言つて眼下の艦隊を見降ろしていた。

空母赤城を中心とした輪形陣を形成する艦隊が洋上を駆ける姿はまさに圧巻の一言につきるだろう。

ここで遅まきながら日本艦隊の編成を紹介する。

第一艦隊は16隻の艦船が4個戦隊に別れて構成されている。

イージス駆逐艦 愛宕 を中心に汎用駆逐艦3からなる第十三戦隊。

ヘリ空母 加賀 を中心にイージス駆逐艦1、汎用駆逐艦2からな

る第九戦隊。

空母赤城を中心にイージス巡洋艦2、汎用駆逐艦1からなる第五戦隊。

そして艦隊の先頭にいるのが東郷司令官座乗のイージス戦艦大和である。

この大和を中心としイージス巡洋艦2、汎用駆逐艦1からなるのが第一戦隊である。

この大和型こそ戦後日本が生み出した最強の軍艦である。

この艦がどのような活躍をするのかは後に判明するだろう。

赤城を発艦した迎撃隊は高度を7000にまで上げ敵攻撃隊の予想進路にて待ち構えていた。

管制官「カウンターからホストへ、お客さんが到着した。これより歓迎会を開始されたし」

E-767早期警戒管制機からの情報がすぐさま迎撃隊の各機のディスプレイへと表示される。

柴神「了解。各機、指定された目標へ向けて攻撃を開始せよ！」

ホスト01「ホスト01(ゼロワン)了解。engage(エンゲージ)!! FOX2！」

ホスト02「ホスト02(ゼロツー)、engage(エンゲージ)!! FOX2！」

柴神が号令を発するとほぼ同時に各機から空対空ミサイルが発射された。

韓国攻撃隊隊長機

隊長「全機、そろそろ日本艦隊の圏内に入る!!安全装置のロックを解除!攻撃用意!!」

攻撃隊隊長がそこまで言ったときアラームがなり響きその直後、自分が光りに覆われた様に感じたところで彼の意識は永遠に途絶えたのであった。

迎撃隊

管制官「カウンターからホストへ、敵編隊の攻撃成功。おそらく敵の指揮官も一緒に撃墜した模様で敵編隊の動きに乱れあり。更なる

攻撃を許可する。」

柴神「全機、自由戦闘を許可する。だが二機編隊のみは絶対に維持しろ！」

柴神の号令と共に一斉にF-3が攻撃隊に襲い掛かった。

最初の一撃で指揮官を失った韓国攻撃隊はだがそれでも反撃を開始する。

韓国側には幸いと言うべきかF-15制空隊の指揮官は無事であったので彼の指揮の下攻撃隊はそのまま直進し攻撃を行うようにし自分達制空隊は残って敵迎撃隊の足止めを行おうとした。

しかし、制空隊はともかく攻撃隊は初手で指揮官を失ったため混乱がなかなか収まらなかった。

それを柴神達迎撃隊もこれを追うとするのだが制空隊がこれを阻み乱戦となる。

だが、制空隊のF-15KとF-3では性能差が歴然としていた。

F-15も格闘戦闘能力は高かったのだがF-3のそれははるかに凌いでいたのだ。

なにしろ自衛隊時代から専守防衛の理念のもと先制攻撃が禁止されていたため最初の一撃をかわさなければならなかったため必然的に格闘戦闘能力が高く設定されていたからだ。

結局、制空隊は全滅し攻撃隊も当初の半数近くの14機が撃墜された。

それでも残った機が攻撃を続行しようと試みたが…

日本艦隊旗艦大和

オペレーター「敵編隊捕捉、11時の方向、距離400(40km)、数16、目標は本艦の模様！ふたてに別れました！左右から挟撃する模様です！」

東郷「右舷の編隊をα、左舷の編隊をβと呼称する。全艦、対空戦闘!!杉田艦長、本艦の戦闘能力を奴等に思い知らせてやれ」

杉田「了解。目にもものを見せてやります」

大和艦長 杉田 淳三郎(すぎた じゅんさぶろう) 一等海佐は

そう言いながら戦闘準備を整えていった。

### 韓国攻撃隊

臨時指揮官 「全機に達する、敵艦隊との距離10 km地点にて攻撃を行う。目標は旗艦の大和だ！奮闘を期待する。突入進路確保、アタックポイントまで20 km」

パイロット1 「時代遅れの戦艦で何が出来る…」

一人のパイロットがそう独り言を呟いたときであった。

### 日本艦隊旗艦大和

杉田 「右対空戦闘、CIC指示の目標、撃ち方始め！」

砲雷長 「トラックナンバー2630、51と53番（右舷127 mm速射砲）、撃ち方始め！」

砲術兵1、2、3 「撃ち方始め！」

砲術兵達がトリガーを引くと62口径127 mm連装速射砲が定められた目標へ向けて砲弾を放つ。

編隊の前方にいた2機が撃墜されたのを皮切りに攻撃隊は次々と撃墜されていった。

パイロット2 「な、なんだ!?!この弾幕は!!」

パイロット3 「尾翼がやられた！高度を維持出来ない！脱出すつ」

127 mm速射砲の弾幕をまともに食らう羽目になった攻撃隊のパイロット達は一瞬でパニックに陥ってしまった。

オペレーター1 「トラックナンバー2630と2633撃墜！」

オペレーター2 「新たな目標、210度！」

オペレーターからの情報を元に今度は左舷に装備された速射砲群が火を吹く。

パイロット4 「助けてくれ、死にたくない！」

パイロット5 「う、うわー！！」

2機のパイロットが恐怖のあまりに高等を上げて離脱を試みる、しかしそれは叶わぬ夢となった。

オペレーター2「トラックナンバー2635、および2636高度を上げました。離脱する模様！」

砲雷長「シースパロー発射始め！サルボー！！」

大和の後部VLSから短距離対空ミサイルが発射され逃げようとした敵機を容赦なく撃ち落とし、空に黒い花火をあげる。

パイロット7「おのれ倭奴め、仲間の仇だ！ミサイル発射！」

残った機が撃墜される前に対艦ミサイルを発射したするも…

砲雷長「31番く36番（76mm連装速射砲）およびCIWS迎撃始め！」

大和の62口径76mm連装速射砲と20mmCIWSの弾幕によって叩き落とされ、ミサイルを発射した機体もすぐに弾幕の餌食となり、10分後には攻撃隊は海上から姿を消しその残骸が波間を漂うだけとなっていた。

韓国艦隊旗艦 金 忠善

朴「全滅だと!?1機も残ってないと言うのか!?!」

攻撃隊全滅の報告を聞いた朴中將は声を荒げて副官に問いただすが返ってきた返答は変わることはなかった。

副官「はい、5分ほど前に攻撃隊の1機から『我、攻撃隊、此方の被害甚大。敵艦隊の損害ナシ、更ナル攻撃ノ必用アリ』との連絡を受けた。直後に交信が途絶えました。5分たつても続報もなにもこないことから全滅したと判断しました」

再度その報告を聞いた朴中將は言葉が出なかった。

自軍の半分の攻撃隊を出し、更に空軍からの援護によって万全を期したはずなのにその結果が全滅となったのだからその衝撃は想像にかたくないだろう。

いや、更に痛かったのは虎の子のF-15とF-35が失われたことだった。

韓国軍のF-35はこの艦隊に搭載している60機のみでF-1

5も同数の機体があるのだが此方はF-15は対北朝鮮のために必要なものでこれ以上は割けないと空軍からは言われている。

韓国空軍としても少ない機数をやりくりして派遣してくれたのだから朴司令官も文句は言えなかった。

朴「くつ、こうなれば艦隊戦で勝負を付けてくれようぞ！攻撃隊が殺られたとは言え、まだ此方にはまだ兵力が残っておるわ!!全艦進路を敵艦隊へ向ける！最大戦速!!」

副官「ハッ、全艦機関最大戦速!!両舷いっぱい!!」

いつもは慎重な副官もこの時ばかりは司令官と同じ気持ちであった。

朴「珍しいではないか。君が率直に私の意見を通すとは」

そんな副官に朴も思わず問いたでした。

副官「私も軍人です。負けっぱなしで引き下がるのは嫌なので…」  
そう言ったきり副官はなにも言わなかった。

日本艦隊旗艦大和

秋山「韓国艦隊が再び此方へ接近し始めました。おそらく艦隊戦を挑むものかと思われます」

秋山からの報告を聞いた東郷はわずかに頬を吊り上げた。

東郷「闘争心のある敵で結構だ。よし、此方も敵艦隊へ近付くんだ。敵艦隊を艦隊戦で叩く!!」

秋山「了解。直ちに空母を退避させ艦隊陣形を―」

秋山がそこまで言ったところで東郷がそれを遮った。

東郷「いや、空母はそのままだ。陣形もこのまま輪形陣を維持しろ！」

秋山「しかし東郷司令、それでは艦隊戦のときに空母が狙われてしまいますが…」

秋山の反論にも東郷は落ち着きはらって言った。

東郷「今空母を分離したらかえって狙われるぞ。それだったら始めからがっちり固めながら敵艦隊を叩いた方が良い。」

東郷の言い分はもつともであった。ここで空母を分離したならば

空母を護衛するために兵力を割かねばならなくなり正面戦力が少なくなるのだ。それならば全ての艦で空母を護りつつ敵艦隊と戦えば被害は少なくなるだろう。

秋山「分かりました。全艦陣形を保ちつつ最大戦速！対艦戦闘用意！！」

東郷「流石俺の参謀だ。理解がよくて助かる」

こうして両者は相対速度60ノットで接近することとなった。そのためさほど時間は掛からずに両者は射程距離へ到達した。

韓国艦隊は距離が40000になったところで一斉に面舵をきる。それを見た東郷も艦隊を取舵にきり、同航戦の状態となった。

オペレーター「敵艦隊射程距離へ到達！」

東郷「全艦、対艦、対ミサイル戦闘！！各艦に伝達、指定された情報が伝達され次第、攻撃を開始せよ！本艦は他艦が第1波ミサイルを発射した後に主砲及び副砲による砲撃を行う！」

杉田「了解。主砲、副砲発射準備！！弾種、徹甲弾！」

大和の主砲と副砲が右舷に向き鎌首を上げる。

この間にも大和は自身の目標の的速を計りながら平行して他艦の目標を伝達する。

これができるのも、巨体を生かして搭載されたスーパーコンピューターのなせる業である。

韓国艦隊旗艦 金 忠善

朴「全艦、対艦、対ミサイル戦闘！！全艦へ通達、指定された目標が到達次第攻撃を開始せよ！！」

金 忠善も旗艦として使用することを前提としているため、他艦への目標伝達を素早く行っていく。

秋山、副官「全艦、発射準備よし！」

東郷、朴「全艦、SSM撃ち方始め！！」

両者の号令が一致し、ほぼ同時に対艦ミサイルが発射されそれぞれ

の目標へ飛翔していった。



## 第5話

東郷、朴「SSM撃ち方始め!!」

二人の号令が同時に響き両者の艦隊から対艦ミサイルが発射されそれぞれの目標へ飛翔していく。

日本艦隊旗艦大和

オペレーター「敵艦隊、対艦ミサイル発射、弾数32」

東郷「全艦ECM（妨害電波）展開、31番〜33番（76mm連装速射砲）およびCIWS射撃用意！」

東郷の命令で全艦が一斉にECMを展開し防御体制に移行する。

オペレーター「敵弾、4発墜落、残り28発進路変わらず!!」

東郷「各艦、SAM（対空ミサイル）発射、迎撃始め！」

ECMで防げなかった残りのミサイルを撃ち落とすべく対空ミサイルが発射され次々に敵対艦ミサイルを撃ち落とす。そして

オペレーター「敵対艦ミサイル全弾迎撃成功。全艦損傷なし。」

全てのミサイルを対空ミサイルで迎撃することが出来、東郷は表情こそ変えなかったものの安堵した。

東郷「速射砲の射程前に迎撃成功したか…見事だな、敵艦隊の状態はどうだ？」

オペレーター「敵第1郡α（アルファ）にて反応が消失したものが多数あります。イージス駆逐艦2隻、汎用駆逐艦2隻、フリゲート4隻撃沈を確認。空母1隻中破、イージス駆逐艦1隻大破、駆逐艦3隻中破。敵第2郡β（ベータ）に損失はありません。」

東郷「ふむ、比較的老朽艦のほうが残ったのか…てつきりα郡のほうが残ると思っていたが…」

東郷の疑問に直ぐ様秋山が答える。

秋山「おそらく錬度の問題でしょうね、β郡は第7艦隊が機動戦団だった頃から配備されていた艦が中心です。一方α郡は早くても1

年ほど前に就役し、一番遅いのが半年前に就役した艦がほとんどです。更に言うのであればα郡の艦艇はほとんど外洋に出たことはありません。逆にβ郡は活発に外洋での訓練を行ってることが確認されていますからその差が今出て来たのでしょうか…」

東郷「成る程…新鋭艦隊のほうは悪く言えば張子の虎だったという訳だ…」

どんなに装備が良くとも使う人間がその使い方を知らなければそれはただの無用の長物と化す。

国力に見合わぬ装備を無理して整備したツケがここに現れている。

東郷がそんなことを考えていると杉田艦長から射撃準備が整ったとの報告が来た。

東郷「さて、彼等に海戦はミサイルの撃ち合いだけではないということを教えてやるか…巡洋艦全艦は本艦が射撃開始を合図にβ郡へ射撃開始！駆逐艦は全力で空母を守れ!!撃ち方始め!!」

杉田「撃ち方、始めー!!」

杉田艦長の命令が発せられるとほぼ同時に46cm三連装砲9門と15.5cm三連装副砲が各々の目標へ向けて火を吹いた。

時系列は韓国艦隊に対艦ミサイルが命中するところまで遡る。

韓国艦隊旗艦 金忠善

朴「な…なんとということだ…」

朴中将はそう言うのがやつとであった。

一瞬にして自らの艦隊が壊滅状態となったのだからその衝撃は想像に難くない。

なにしろ目の前に移る光景は自らが想像していたものとは完全に真逆の出来事であったのだから…

何故だ…日本艦隊を火だるまにするはずが何故自分達が火だるまになり沈められている？

何故、倭奴の艦隊なぞにこのようなめに合う？

何故、自分達が負けている？

負けている？この俺が…？

島国の劣等人種なぞにこの俺が負けているだと？

有り得ぬ…有り得ぬ…有り得ぬ!!

そんな考えを否定するかのようによいオペレーターから被害状況が報告されていく。

オペレーター「

イージス駆逐艦

権慄（クオン ユル）、

宣祖（ソンジョ）、

沈没。

金 誠一（キム ソンイル）

敵弾1発命中、戦闘不能。

駆逐艦

金 庾信（キム ユシン）、

許 浚（キョ シュン）

沈没。

駆逐艦

蔣 英実（チャン ヨンシル）、

壇君（タンクン）、

金 正浩（キム ジョンホ）

中破、戦闘能力半減なるも航行に支障なし。

第713フリゲート部隊全滅！

本艦敵弾命中により発着艦不能、されど航行可能です」

副官「第72戦団の状況はどうだ？」

茫然自失の朴司令官に変わり副官が質問する。

第72戦団は東郷達がβ郡と呼称している部隊のことである（朴中将の直率部隊は第71戦団）

オペレーター「は、第72戦団は敵ミサイルの迎撃成功により損害はありません。現在、空母 李 如松（リ ジョシヨウ）から指示を求めている電文が来ています」

この報告を聞いて副官は前線を立て直すために一時的に海域から

の離脱を命じた。

副官「やむを得ないか…これより第71戦団は当海域を一時離脱し艦隊を再編する。第72戦団は当海域に留まり71戦団の離脱を援護、敵艦隊の足止めを行え。残存艦に連絡——」

朴「ならん!!」

副官の言葉を遮り朴司令官が怒鳴った。その目は血走り正気を失ったということが一目で解るほどだった。

朴「第71戦団全艦最大戦速で敵艦隊へ突撃!!第72戦団は現海域で待機だ!!」

副官「司令官! 損傷が多い我が戦団が突撃しても敵艦隊に有効打を当てることは不可能です!!」

副官が異議を申し立てるが朴司令官はもはや聞く耳を持たない。

朴「黙れ!!これ以上豚足(チョッパリ)共にコケにされてたまるか!!あの時代遅れの旗艦を沈めて倭奴共の自信を木っ端微塵に粉碎してやる!!生き残った奴等も全員只では殺さぬ!!生まれたことを後悔するほど痛め付け首をジリジリと切り落としてくれようぞ!!」

日本人へあらんかぎりの侮蔑を叫んだところでオペレーターから新たな報告が寄せられる。

オペレーター「敵艦隊の旗艦から小型目標が分離! 対艦ミサイルと思われまます!!は、速い!? 敵ミサイル速度、これまで対艦ミサイルよりも遙かに速い速度です!!」

朴「なに!? 倭奴共にそんな速いミサイルを作る技術力があるというのか!? げ、迎撃だ! 全艦迎撃せよ!!」

直ぐさま第71戦団残存艦から迎撃のミサイルが打ち出されるが

オペレーター「迎撃ミサイル全弾不発!! なおも本艦へ向かってきます!」

副官「総員、衝撃に備えろ!!」

副官が叫んだ直後、旗艦 金 忠善の周りに水柱が立ち上がった。

朴「な、なんなんだ…全弾外したのか?」

副官「いえ、違います!!これは…これは砲弾です!!」

朴「ほ、砲弾だ?!」

副官からの報告に朴司令官は驚きを隠せなかった。彼の頭の中では、いや、韓国艦隊の誰もが砲弾での闘いは過去の遺物であり現代では対空戦闘や陸上へ使うだけのものだと思ひ込んでいたのだ。

ここでも急速に海軍を拡張した無理が露呈した。

陸上とは違って海上ではあらゆる不確定要素が遥かに多いのだ。

長年陸軍国であった韓国はこれに気付くのが遅すぎた。

そしてその代償は高くつくこととなった。

オペレーター「敵旗艦からの砲撃により駆逐艦 壇君 沈没!!各艦に混乱が広がっています!このままでは!!」

朴「72戦団は何をしている!?このような時にこそ彼等がいるのだろうか!!」

72戦団に援護をと期待した朴司令官だがの期待は虚しくも空回りした。

副官「72戦団は現在敵巡洋艦部隊の砲撃を受けて応戦中!我が戦団の支援は不可能です!!」

次々と凶報が入って来るなかオペレーターが止めとも言える報告をした。

オペレーター「し、司令官…た、大変です…」

朴「こ、今度はどうしたと言うのだ!」

オペレーター「対馬上陸部隊より『我、敵艦隊ノ砲射撃ニヨル攻撃ヲ受ケツツアリ、至急救援ヲ乞ウ』との連絡が入りました!!」

朴「なん…だと…」

それを聞いた彼は自らが敵の罠にかかったことを悟ったのだった。

対馬沖

日本第三艦隊 旗艦 信濃

オペレーター「敵陣地への着弾を確認。敵部隊の損害大です」

副官「敵の人工衛星を叩いたとはいえ、こうも簡単に接近出来たとは：敵は今ごろ浮き足立っているでしょうね」

南雲「まあ、かといって同情する気はないけどねえ。此方の領土内に土足で踏み込んだんだ。たっぷりと説教してやらないとね」

そう言つて第三艦隊司令官 南雲 佳子（なぐも けいこ）二等海将（29）は双眼鏡を覗きこんだ。

旗艦 信濃以下の艦艇から大小様々な砲弾が韓国軍上陸部隊へ降り注ぐ。

打ち出される砲弾はほとんどが榴散弾で命中と同時に辺りを燃やし尽くす。

そんななかを生き残った戦車や自走砲が海岸ギリギリまで出てきて主砲を発射するものの虚しく艦隊の手前で水柱をあげるだけであつた。

そしてその生き残った彼等も手痛い反撃をくらい先に逝つた仲間  
の元へと強制的に送られていった。

オペレーター「敵上陸部隊の壊滅を確認」

南雲「大隅に通信を開け」

艦隊の後方にいる輸送艦隊へ通信を開くと対馬奪還部隊司令官

山下 利古里（やました りこり）陸将補（26）が映像に移しだされる。

南雲「敵陣地への砲撃は完了したよ。上陸はいつでも大丈夫さ」

山下「よし、後は我々陸軍に任せてもらおう。支援に感謝する」

そう言つて山下は通信を切つた。

副官「相変わらず愛想ないですね。もう少し協力的でも良いでしょうに：」

山下の態度に副官は不満気に呟いた。

南雲「まあ、仕方ないさ。彼女にも色々あるからね」

苦笑しながらも南雲は副官をたしなめる。

それから5分後に大隅以下6隻の揚陸艦からヘリとLCAACが発艦し海岸へと向かつていった。

南雲「東郷のダンナもそろそろ仕上げの頃だろうね：敵の司令官の

慌てる様が容易に想像出来るね…」

独り言を呟きながら南雲は敵艦隊のことへと思考を移した。

南雲「まあ、あんたらが仕掛けて来たんだ。反撃の覚悟が無い奴に軍だ、正義だ、語る資格は無いよ」

その言葉は乗組員の声に掻き消され誰の耳にも入ることはなかった。

## 第6話

日本艦隊旗艦 大和

オペレーター「第三艦隊の南雲司令官より入電。『我、対馬ノ上陸ニ成功セリ。』とのことですよ！」

乗組員「「「「いよっしゃやったー!!」」」」

オペレーター「報告を聞いた乗組員達は歓声の声を上げるが直ぐ様東郷がそれを制止する。」

東郷「喜ぶのはまだ早いぞ!!喜ぶのはすべてが終わってからだ！」

東郷の言葉によりCICは再び張りつめた空気となる。

このことからみても彼等もまた、一流の軍人であるということが伺える。

東郷「だが、これで心置きなくやれるのは確かだ。総員、あともう

一息だ!!気合いを入れろ!!」

乗組員「「「「了解!!」」」」

その直後、東郷の激に呼応するかの様に大和の主砲が咆哮し、目標へと向かう。

放たれた砲弾は見事韓国艦隊旗艦 金 忠善に命中する。しかし

：

見張り員「遠4、近4、命中1、敵軽空母に命中弾1あり、されど爆発なし、信管作動せず！」

命中した徹甲弾は信管が作動せず、そのまま突き抜けてしまったのだ。この報告を聞いた秋山は顔をしかめる。

秋山「やはり、現在の軍艦相手では装甲を貫通してしまうようですね……」

東郷「軽空母とはいえかなりの大型艦だったから徹甲弾にさせたが無理だったか：艦長」

杉田「解っております。弾種変更、次弾、三式触発榴散弾！」

三式触発榴散弾は対艦艇用が開発された砲弾で、徹甲弾よりも信管を過敏に設定することができ、対象を破壊するように設計されている。弾内部には可燃性および爆発性の高い物質が込められおり命中



した敵艦を内部から燃やしつくす。厚い装甲を纏った戦艦や大型空母には効果は限られてしまうが駆逐艦や軽空母には十分に通用するはずである。

砲術士「弾種変更、三式触発榴散弾、装填」

かつての戦艦では弾種変更の命令が出てから数発撃たなければ変更することが出来なかったが今では装填装置の自動化、高性能化により短時間での砲弾の変更が可能となったのだ。

砲雷長「三式触発榴散弾、装填完了！目標、方位よろし!!」

砲雷長の報告が上がると発射を知らせるブザーが艦全体に響き渡る。

杉田「つてー!!」

杉田艦長の号令によって重量およそ1.5トンに及ぶ砲弾が放たれる。そして1分とたたぬうちに：

見張り員「弾ちゃーく今!!」

見張り員の声と同時に金 忠善の周りを水柱が被う。

立ち上がった水柱は全部で8つ。つまり命中弾が1発出たことになる。

見張り員「艦橋よりCIC。遠3、近5、命中1、敵艦艦尾に命中弾1発を確認！」

東郷「よし、次弾装填急げ！」

オペレーター「司令、敵駆逐艦1、本艦に接近中！」

ディスプレイを見ると、敵軽空母の後ろを航行していた駆逐艦が主砲を撃ちながら軽空母の盾になるように陣取っていた。

杉田「敵駆逐艦には副砲にて応戦、主砲はそのまま敵軽空母に砲撃続行」

大和の副砲が敵駆逐艦へと砲身を向ける。

その間にも駆逐艦は砲撃を続けながら接近し、距離が4000になったところで駆逐艦の砲弾が大和をとらえた。

オペレーター「敵弾、本艦右舷第2主砲塔付近に被弾」

杉田「ダメージコントロール、被害状態知らせ」

ダメコン「右舷、第2区画に小規模火災発生、主砲塔への被害なし、

現在消火活動中です。負傷者はおりません』

秋山「やはりこういう場合、改めて戦艦の凄さを実感しますね、汎用駆逐艦だったらどれくらいの被害が出ていたことか…」

大和には先代と同様に自身の主砲弾の直撃にも耐えられる装甲が貼られており5インチ砲位では蚊に刺されたようなものである。

東郷「とはいってもやられっぱいというのは癩に触るな、艦長」

杉田「は、副砲、撃ち方始め！」

大和の155mm三連装副砲二基が毎分10発という早さで射撃を始める。

初弾は全弾外したが二射目からは命中弾をだした、中口径の砲とはいえ現代の駆逐艦相手にはオーバーキルであった。

71戦団で唯一無傷だった駆逐艦 金 富軾(キム・プシク)はあつという間に穴だらけになり、弾薬庫に引火し爆沈した。

オペレーター「敵駆逐艦撃沈」

東郷「よし、ようやくメインデイツシユだ。主砲、撃ち方始め！」

杉田「は、撃ち方始め!!」

三度(みたび)大和の主砲が吼える。速力が落ち、満身創痕の金忠善にはこれを避けることも出来るはずがなかった。

一発は艦橋に命中し、CICにいた朴司令官を押し潰し爆発、艦橋を破壊しつくした。艦橋部分にはCIC以外の装甲は皆無と言ってよく三式触発榴散弾でもCICの装甲を貫通してしまったのだ。

それ以外の箇所にも命中した主砲弾は4発あったが、こちらは艦橋部分よりも装甲が厚いのがかえって災いした。比較的厚い装甲によって抑えられた主砲弾はそこで爆発し艦内を破壊する。その爆炎が艦内に残っていた航空機や弾薬庫に引火し破壊力を増大させその有り余る破壊力を外へと求めた。

まさに一瞬の出来事であった。艦が一瞬膨らんだように見えたと思ったら、核弾頭が爆発したようなきのこ雲を出し、真つ二つに折れその艦体を海中へと引きずりこんでいった。

轟沈である。生存者はわずか10名にも満たなかった。

オペレーター「敵軽空母撃沈!!」

オペレーター2「現在敵艦からの攻撃無し」

東郷「全艦、撃ち方止め。全艦の被害状況と敵艦隊の動向を報告せよ」

勝利の余韻に浸ることもなく東郷は状況報告を矢継ぎ早に指示する。

オペレーター1「は、敵α群の残存艦は全艦が大破し、撤退していきます。β群はα群の撤退の援護をしている模様で対艦ミサイルを発射していますが照準はまばらで現在のところ迎撃出来ており被害はありません」

オペレーター2「巡洋艦摩耶および那智がβ群からの砲撃により数発被弾しましたがどちらも戦闘及び航行に支障はありません。それ以外の艦からは迎撃時にミサイルの破片があたった程度で目立った損傷はありません。本艦の敵弾の命中箇所は現在消火は完了し応急修理もあと少しで終了することです」

秋山「結果だけ見れば完勝と言ったところですかね：敵残存艦の進路はどこに向かっていますか？」

ふと気になった秋山が敵残存艦隊の進路を問う。もし残存艦隊が上陸部隊の方へ向かおうものならば厄介だからだ。

とはいえっても上陸部隊の方には第三艦隊が護衛についているから問題は無いがこういうことは心配してもしすぎるといふことはない。

オペレーター1「敵残存艦隊は進路を0-1-5に固定しています。この進路ですと韓国本土の方へ向かう可能性が高いです。すでに第三艦隊以下各方面に情報をリンクしていますから例え敵残存艦隊が途中で対馬方面に進路を変更したとしても対処は充分に可能です」

秋山「そうですか、判りました。東郷司令、戦闘配置を解除し生存者の救助を具申します」

戦闘が終了したら敵味方構わずに助ける。それが秋山の心情でもあった。東郷もその意見には賛成であった。

東郷「首席参謀の具申を通す。艦隊全艦、戦闘配置解除。ただし、警戒体制はくずす。特に対潜、対空警戒は厳重にするように。これより

生存者の救助活動に入る。救助した敵艦生存者の収用は加賀に順次移送すること。収用人数が限界に達した場合は加賀艦長の采配で他艦への移送を許可する。以上だ」

こうして後に対馬沖海戦と呼ばれる闘いは終わった。

しかし運命の神はまだこの劇を続けたいとでも言うかのようにまた別の脚本を用意してきたことをこのときの彼等は知るよしもなかった。

## 最終話

金 忠善のCICはパニック状態であった。

オペレーター1『艦尾に被弾。右舷スクリュー破損、速力18ノットに低下!』

オペレーター2『揚陸艦隊旗艦 独島 から再度救援要請が入ってきています!』

オペレーター3『駆逐艦 金 正浩 に総員退艦命令が出されました。現在救助要請がきています!』

オペレーター4『第72戦団と隔離されました。通信不能!』

朴『おのれ…おのれおのれおのれ!!倭奴どもめ!人間の進化の出来損ないが!下等生物の分際でこの私に楯突きよって!!』

副官『司令官、このままでは我々は全滅します!艦隊の撤退を!』  
朴『撤退だと?ふざけるな!!この私に恥をかかせる気か!』

副官『ですが司令官、もはや艦載機を失った本艦がいたところで悪戯に犠牲を増やすだけです!』

朴『黙れ!!敗北主義者の言葉など聞く気はない!!』

そう叫んだ朴は副官に銃を向けた。その瞬間、これまでに無い揺れがきたと思ったらそこで視界が暗転した。

旗艦大和医務室

男「っ!…ここは…?」

男が目を覚まして辺りを見回す。

どうやら医務室のようだがどこの医務室なのだろうか…そう思っている白衣を着た女性が近づいてきた。

背が小さく一見中学生なのではと思ってしまう。

その女性が流暢な韓国語で男に問いかけた。

?「気がついたか、ここは大和の医務室だ。私は主治医の鏑木 美波(かぶらき みなみ)。階級は一等海尉。貴官の名前を聞きたいが大丈夫か?あ、もちろんこれは尋問ではなく、ジェネーブ条約にのっ

とつた行為だから機密項目等は問うつもりは無いから安心してほしい」

あまり流暢な韓国語なので男は一瞬呆けたがすぐに気を戻して問いかけに答えた。

男「李 翔潤（リ ショウジュン） 36歳、階級は大佐。空母金忠善 で艦隊司令官の副官の任についていました。」

本来ならばそこまでは言う必要は無いのだが、彼は自然と答えていった。

この状況からして自分達は負けたと考えるのが妥当だし、これだけの負け戦をしたのだから母国へ帰っても厳しい目で見られるのは必然だと言うどこかなげやりのような気持ちがあったのだろう。

古今東西、敗軍達へ向けられる眼差しが悪いのは変わらない。特に韓国ではそれが抜きん出ている。それを知っているからこそそんな気持ちになったのだろう。

鏑木「旗艦の金 忠善に乗っていたのか、しかも指令部要員とはな… 眞実は小説よりも奇なりとはまさにこの事だな」

李「どういうことですか？」

鏑木「少し長くなるがこれまでのことと現在の状況を話そう…」

そう言つて鏑木はあの海戦から2日が経過したこと。

対馬に上陸した韓国の部隊が降伏したこと。

自分は一番の重症者だったため艦隊で最も医療施設が充実した大和に移送されたことを語った。

鏑木「貴官は一命は取り留めたが未だ予断を許さない状況だ。体がある程度回復したら本土の病院へ移送することになっている。それまで休んでいてくれ」

そこまで聞いたところで体から力が抜けていくのがわかった。

やはりまだ体力が回復してないのだろう、ここは素直に体を休めた方が良い。

そう思つて足を伸ばそうとしたとき右足の方に違和感を感じた。

なんだと思つて掛け布団を外すと目に入った光景に目を見開いた。右の太ももから包帯が巻かれている。しかしそこから下の部分、膝から

先がすつぽりと無くなっていた。

李「こ、これは!？」

鏑木「すまない。貴官が海上に漂流しているのを発見した時点で貴官の右足はボロボロだったんだ。そのまま放置すれば他の所にも影響が出る可能性が高かったためやむ無く切断了。」

言葉を失った李に鏑木が申し訳ないという顔で語った。

五体満足で助けたかったがそれが叶わなかったことが医師としての彼女のにとっては悔しかった。

しかし、李にとってはそんな状態にまでなった自分を助けてくれたことの方が嬉しく思った。

李「いえ、そんな落ち込まないでください。こうして生きているだけでも奇跡なのですから。」

鏑木「そう言ってもらえると助かる。つとすまない。話し込んでしまったな、また改めて話すでしょう。さ、休んでくれ」

李「ありがとうございます。」

そう言つて李は今度こそ体を横にし、5分たった頃には寝息をたて始めた。

それを確認した鏑木はまた別の患者を見るため李のいるベッドをあとにした。

### 旗艦大和艦橋

秋山「東郷司令官。岩国基地から発進したオスプレイ部隊から通信が入りました。10分後の1533に本艦隊に到着するとのことです。」

東郷「そうか、これでこの艦隊にいる捕虜達を本国に移送できるわけだな。」

秋山「はい、そろそろ艦隊の収用能力にも限界が来ていましたから、これで一安心ですね。」

東郷「全くだ。さすがに赤城に捕虜を収用するといろいろと不味いからな。おかげで重症者の捕虜は一部本艦が担当する羽目になってしまったがな。」

あれから2日間、第一艦隊の各艦は敵艦隊の生存者の救助を行ったが思いのほか救助者が多く捕虜収用艦に指定された加賀の収用能力では足りなくなってしまう。

そのため加賀艦長の報告を聞いた東郷は他艦にも捕虜の収用を認め、旗艦大和にも重症者に限り捕虜の収用を許可した。

当然幕僚達からは懸念の声がでたが東郷は問題ないと押しきった。空母赤城にも収用すると言う案もでたが現代の空母は機密の塊のため見送られた。

二人が話し込んでいたときオペレーターから報告が入ってきた。

オペレーター「東郷司令、第三艦隊の南雲司令官と上陸部隊指揮官の山下司令官から通信が入ってます。C I Cへお願いします。」

東郷「わかった。秋山、それと副長、艦橋を頼む。」

秋山 副長「了解しました。」

そう言って東郷は艦橋を秋山と副長に任せC I Cへと足を運んだ。

旗艦大和C I C

オペレーター「敬礼！」

東郷がC I Cに入るとC I Cにいる乗組員が敬礼で迎える。

それを東郷は返礼し作業を続けるように促し、通信を開けと命じた。

僅かな間の後、二つのパネルにそれぞれ女性の顔が映し出された。

片方は第三艦隊司令官 南雲 圭子 二等海将(29)。もう片方

は対馬奪還部隊司令官山下 利古里 陸将補(26)。

双方ともに軍の拡張政策の際にその才能を見いだされて出世した才女である。

東郷「うん、いつものごとく綺麗だな。お二人さん。」

山下『相も変わらず不真面目だな貴様は。』

東郷の言葉に山下は不満そうな顔をする。

南雲『まあまあ、落ち着きなつて、それがダンナの良いところでもあるんだからさ。』



そう言つて南雲は山下をたしなめる。

若くして将官になつた重責からなのか山下は必要以上に他人に厳しく当たることが多い。

そんな山下からの相談を受けていたのが南雲だった。

元々南雲が姉御肌でサバサバした性格だったためもあり二人は所属こそ違うがプライベートで親交があつた。

話を戻す。

東郷「それじゃあ、本題に入るとするかな。」

南雲『はいよ、まずウチの第三艦隊からだね、第三艦隊は15日に、上陸部隊の支援を実施したあとは周辺の警戒活動を実施、全艦に損傷はなし現在は対馬北方の海域で哨戒活動中、今現在において韓国軍からの接敵はないよ。』

南雲が現状を報告し終わると、次に山下が口を開いた。

山下『対馬奪還部隊、第一水陸両用機動団は10月15日に発生した戦闘において捕虜を多数拿捕、現在対馬空港に身柄を拘束している。10月15日夜の戦闘終了宣言から10月17日1300現在までは特に問題は発生していない。』

山下が生真面目のお手本とも言つても過言ではない口調で現状を報告する。

東郷は内心もう少し肩の力を抜いても問題はないと思つたがこれは彼女個人の問題なのであえて黙っておいた。

東郷「第一艦隊は15日の海戦において敵艦隊を撃破した後、撃沈した敵艦の乗組員救助を実施。その後は特に異常はない。現在は救助した乗組員を移送するため岩国からのオスプレイ部隊を待っているところだ。」

あらかた相互に情報を交換したところで話題は韓国政府の動向へと進んでいった。

山下『しかし、韓国政府は何を考えているのだ。海軍の主力を失い、制空権と制海権を失つた今、もはや打つ手は無いはずだが…』

南雲『確かにね…ここまでできて何もアクションを起こさないのは幾らなんでもおかしいね…』

韓国第7艦隊を撃破してから2日、韓国政府はこれと言った動きはなく沈黙を貫いていた。

日本政府もこの2日間、第3カ国の駐在大使館を通じてコンタクトをとろうとしたのだが全て門前払いを受けていた。

東郷「考えられるのは巡航ミサイル“天竜”を使つての日本本土への報復攻撃か、あるいは俺達の艦隊に航空機による飽和攻撃か：どちらにせよ現実味は薄いが…」

このとき東郷はどこかつつかえるような違和感を感じたが気のせいだと心の片隅に追いやつた。

東郷「ま、政治の話はここまでだな。それじゃお二人さん。また次の定時連絡のときにー」

そこまで東郷がしゃべつたとき警報のサイレンがけたたましく鳴り響いた。

東郷「状況を報告せよ。」

それでも東郷は慌てることなく落ち着いた声で報告を促した。

この程度で慌てるようでは指揮官たる資格は無いのだ。

オペレーター「統合幕僚幹部より緊急入電です！」

東郷「なにがあつた？」

オペレーター「は、……………えっ、そ、そんな…まさか…」

東郷「報告は正確に行え！」

驚きのあまり言いよんだオペレーターを一喝した東郷だがその後オペレーターからの報告を聞いて目を見開いた。

統合幕僚幹部からの情報にはこう書かれていた。

「新たな舞台が幕を開けようとしていた。」